

行動主義の批判

シバタ, シンゴ / 芝田, 進午 / SHIBATA, Shingo

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

103

(終了ページ / End Page)

148

(発行年 / Year)

1956-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017414>

行動主義の批判

芝田進午

一、行動主義心理学の批判

二、行動主義社会心理学の批判

三、行動主義とパヴロフの条件反射の理論

四、新行動主義の批判（以下、次号）

わたくしは、さきに論文『アメリカ心理学の批判』（『社会労働研究』三号）、『社会心理学の批判』（同上、四号）において、現代心理学の主要な学派であるプラグマティズムとフロイト主義をとりあげ、これについて批判的検討をくわえた。すでにあきらかにしたように、プラグマティズムならびにフロイト主義の心理学・社会心理学は、いずれもしばしば唯物論的にみえ、また科学的であるようにみえたが、実際はもっとも反科学的な「心理学」であって、この点についてはここではくりかえさない。

この論文では、われわれは、ひきつづき現代心理学の主要な学派の一つである行動主義をとりあげ、その科学的本質をあきらか

にする。われわれは、行動主義というものがたんなる心理学という一分野の問題であるにとどまらず、実は哲学、社会心理学、マス・コミュニケーション理論、サイバネティクス、近代政治学、言語学、意味論、さらに精神工学、人間工学、科学的管理法、そして「生産性向上運動」など、広汎な理論的・実践的分野におよぶ一つのイデオロギー的運動であること、したがってその批判は今日わが国で理論研究に従事するものにとって緊急の課題であることをしめすはずである。

一、行動主義心理学の批判

(一) 理論構造

行動主義 (Behaviorism) とは、一九一二年、ジョン・B・ワトソンがコロンビア大学で『行動主義者のみた心理学』という論文を発表して以来、主としてアメリカ合衆国において支配的とな

った心理学派の一つである。それは、常識的にはワトスン個人とだけ結びつけられてきたが、実際は、非常に広範囲の心理学者をとらえ、とくにK・S・ラシュレー、W・S・ハンター、F・H・オルポートらによってうけつがれ、さらに最近ではC・L・ハル、E・C・トールマン、B・F・スキナーらによって代表される「新行動主義」に「発展」し、合衆国はもちろん、わが国の学界でも、ゲシュタルト心理学、フロイト主義とならんで支配的な学説になっている。

行動主義はどういう理論構造をもっているか。わたくしは、さきあげた論文で、プラグマティズム、フロイト主義、新フロイト主義について、これらが「三段階論法」的理論構造をもっていることを指摘したが、この理論構造は行動主義についてもそのままあてはまるとわたくしはかんがえる。

行動主義の第一の論法は、旧来の主観的心理学にたいする「革命的」批判である。ワトスンはかんがえる。心理学はごく最近まで、まったく中世の遺物ともいうべき伝統的な宗教と哲学の支配下におかれてきた。これらの伝統的な宗教ないし哲学は、各人には身体からはつきり区別された「魂」があるといつて、ここから一切の心理的現象に説明をあたえてきた。だが、「魂」にふれた人もなく、「魂」を試験管にとった人もいない。そしてとくに一九世紀後半、自然科学の発達とともに、このような「魂」の概念は、心理学では支持されなくなった。一八六九年、W・ヴントは、は

じめて心理学の実験室をつくり科学的な実験心理学への道をひらき、神秘的な「魂」という概念のかわりに「意識」という概念をおきかえた。ヴント以来、「意識」は心理学の中心概念になったのである。だが——とワトスンはいう——「意識」は見ること、さわることも、嗅ぐことも、味わうことも、動かすこともできないではないか。だから「意識」は「魂」の概念と同じく証明されることができない。「意識」も「魂」もひとしく非科学的な形而上学的概念にすぎない。ワトスンはいう。

「意識という概念がいかに非科学的であるかを示すために、しばらくウィリアム・ジェームスによる心理学の定義をみよう。ジェームスはいう。『心理学とは意識そのものの状態の記述と説明である』と。だがジェームスは、ここで証明せんとするものを仮定する定義から出発し、人に訴ふる論証 (argumentum ad hominem) によって困難をのがれている。……そして意識というものが存在し、これを内観によって分析できるという大仮定の結果、個々の心理学者の数だけ意識の分析があることになる。心理学の問題と実験的にとりくみ、解決し、方法を標準化する道はないことになる。」⁽¹⁾

こういってワトスンは、かれより以前のありとあらゆる心理学、とくに、ヴント、ジェームス、O・キェルペ、E・B・テイチナ

1、J・R・アンジェル、C・H・ジャッド、W・マクドゥガルらの心理学を「古い心理学」となづけて、これを徹底的に批判した。いまや、ワトソンの心理学は「新しい心理学」であり、心理学の歴史における「完全な革命」⁽²⁾である。いや、その影響するところ、心理学の分野だけにとどまらない。ワトソンの著者の出版はアメリカ・イギリスの思想界に一大衝撃をあたえ、その大新聞は「行動主義は人間の精神史において劃期的なものであり」、また「倫理学、宗教、精神分析、いや実際、すべての精神科学、社会科学をも革命化する」⁽³⁾と評して、これを歓迎したのである。

もちろん、ヴント以来の観念論的心理学、とくにジェームス、マクドゥガルらの主観的心理学を批判することは大変結構なことである。また「内観」が心理学の方法として非科学的であることを指摘するのも非常にいいことである。では一体、ワトソンは、この「古い心理学」のかわりに、どのような「新しい心理学」を主張しようというのか。

行動主義の第二の論法は、「古い」主観的心理学のかわりに、「新しい」客観的心理学を主張することである。ワトソンはたずねる。われわれはなぜ、観察できるものを心理学の真の領域としななのか。観察できるものだけに限定して、これについてのみ法則をたてることにしよう。われわれがいま観察できるものはなにか。そうだ、われわれは、行動——生物体が行ったり言ったりすること——を観察することができる。こういって、ワトソンは宣

言する。

「心理学は、行動主義者のみるところでは、純粋に客観的・実験的な自然科学の一分科である。その理論的目標は行動の予見と支配である。内観はその方法の本質的部分を形成せず、そのデータの科学的価値はそれが意識として解釈されやすいことによるものではない。行動主義者は動物の反応の一貫した様式をえようとところみる。行動主義者は人間と動物のあいだを区別しない。人間の行動は、いかに精緻で複雑であろうとも、行動主義者の全研究分野の一部にすぎないのである。」⁽⁴⁾

いまや、心理学の対象は「意識」ではなく「行動」でなければならぬ。あらゆる主観的用語、感覚、知覚、表象、欲望、本能、目的、いや思考や情緒さえも放棄されねばならぬ。問題なのは「行動」だけであり、この「行動」を「刺戟と反応」(Stimulus and Response) によって記述することだけである。「刺戟」とは、一般環境におけるなんらかの対象、あるいは動物の生理的條件におけるなんらかの変化のことであり、「反応」とは、この「刺戟」によっておこる動物の行動のすべてである。心理学者にとって問題なのは「行動」だけであり、「刺戟と反応」の連鎖を追及することだけだといっているのである。

たしかに、ジェームスやマクドゥガルの主観的心理学と比較す

るとき、ワトソンの行動主義は「客観的」であり、厳密に「自然科学的」であるように見える。それは「唯物論的」であるようにみえる。だがそれは本当に客観的であり、唯物論的であるといえるだろうか。ひきつづき、かれの説明するところをきこう。

さて、心理学の対象は、「意識」ではなく、「行動」であり、「刺戟—反応」だけだとされた。ではかれはどのようにこの「刺戟—反応」の継起を説明するのか。「われわれは、行動を説明するのに、物理学と化学の普通の法則以外にも必要としない⁽⁵⁾」とかれはいう。そして、人間の身体とは思考をもたない一つの「有機的機械」にほかならず、この「機械」は横紋筋、平滑筋、腺によって「反応」する。そこでは、大脳、脊髄、中枢神経系はなんら中心的な重要な役割をはたさないと⁽⁶⁾いうのである。なるほど、ワトソンはパヴロフの有名な実験を援用し、「条件反射」という用語（多くのばあいワトソンは「条件反応」という用語をつかうが）を随所で使用してはいる。しかしそのばあい、かれは中枢神経系の活動なし高次神経活動の意義をまったく無視し、「条件反射」の思想を完全に俗流化する。たとえば、ワトソンの自慢する「実験」の一つをみよう。かれは報告する。生後一八ヶ月の幼児がいて、この幼児は金魚鉢の金魚をみると恐怖反応をおこした。ではどうすればこの「恐怖反応」を除去できるか。この幼児の眼前で、金魚をおそれない四才の小供に金魚を手づかみにさせて金魚が無害であることをしめしても、この幼児の恐怖反応はなくなる⁽⁷⁾。そこで

ワトソンはその得意の「実験」にとりかかる。すなわち、食事の時、一〇フィートの長いテーブルの端に金魚鉢をおき、これにカバーをかけておく。そして幼児の前に食事がおかれるや、すぐこのカバーをとりのぞく。もし幼児が恐怖反応をしめせば、反応をしめさないくらいの距離まで金魚鉢を遠ざける。こういう手続きを毎日つづけて、少しづつ金魚鉢を幼児の方に近づけてゆく。このように金魚を幼児の食事と一緒に条件づけるなら、四、五日すれば、金魚が幼児の眼前におかれるようになって、幼児は恐怖反応をしめさないようになるだろう。したがって、とワトソンは結論する。この方法は全身体反応の内臓の条件づけにもとづいてい⁽⁸⁾る。つまり「恐怖をのぞくためには腸を条件づけねばならない」のであって、恐怖のような情緒は内臓の活動に左右されるというのである。パヴロフのあの厳密な実験方法に比して、ワトソンの条件反射の「実験」がどんなに粗雑きわまりないかは論外としても、後者では高次神経活動について全然顧慮されていないことに注意されたい。はたして、ワトソンは、唯物論的で科学的な「反射」(Reflexes)という用語ではなく、むしろきわめて卑俗な「もがき」(Squirmings)という用語をえらぶ⁽⁸⁾といつて、条件反射の理論を完全に俗流化するのである。

かくして、一切の人間の行動は、筋、腺、内臓の機械的な「反応」運動ないし「もがき」運動だと説明される。ワトソンによれば、唾液を分泌することも「行動」であれば、汗をかくことも

「行動」である。いや、思考もまた「行動」であり、テニスや野球と同じような筋活動にほかならない。思考は「たんなる談話」であり、かくされた筋組織をもった談話⁽⁹⁾にすぎないのである。みられるように、行動主義者は、人間における一切の心理的なものを筋、腺、内臓の反応運動、もがき運動の体系に解消する。そしてこの体系が「習慣」とよばれるものである。言語習慣(思想)はこのような筋運動の習慣であり、記憶は筋運動の習慣の保持にすぎない。たとえば、ある人が明日一時、東京駅で待ち合わせそうという約束をしたばあい、かれがその約束を守るかどうかは、かれの「口唇習慣」がそのときまで引きつづき筋肉運動をやっているかどうかによってきまるとワトソンはいうのである⁽¹⁰⁾。

こうして、行動主義は人間の心理現象を説明するのではなく、反対にこれを排除することによって「説明」したと思ひこむ機械論である。それは唯物論ではなく、俗流唯物論である。いや、正確にいえば、俗流唯物論でさえない。むしろ、「附帯現象説」(epiphenomenalism)であり、心理学における「肉体主義」と規定されるべきである。それは、人間の hoch 神経活動を無視し、一切の心理現象を「行動」にすりかえる。そのかぎり、それは客観的であり唯物論的であるようにみえる。しかしこのように意識を卑俗化することは、実は「行動」という概念そのものをも卑俗化していることに注意すべきである。かつてジェームスは、心理学の対象を「意識の流れ」として記述したが、ワトソンによれば、

これは「行動の流れ」だといわれなければならない⁽¹²⁾。いまや、存在するのは「行動」だけであり、「行動の流れ」だけである。一行動」はただ「流れる」のみである。人間の行動の hoch の意識性、計画性、社会性、その実践的性格は否定され「行動」はただ水のように「流れる」形而上学的実体に変化されてしまう。ワトソンはジェームスの「意識の流れ」を非科学的だというが、実際はジェームスのいっているおなじものの名前をかえただけなのである。

さて、行動主義者によれば、人間の思考とは筋習慣であり、また唇という閉じた戸の中で潜在的におこなわれる談話にほかならなかった。一体、人間はいつ思考するのか。それは、かれらが言語組織の準発声的使用によってかれらが適応していかない状況から脱することができるときだけである。もし口唇の筋運動がとまれば、思考はなくなるだろう。思考とは「試行錯誤の過程」であつて、それは「手の試行錯誤」とまったく同じものである⁽¹³⁾。みられるように、人間の意識・思考が客観的存在の大脳皮質への反映であること、また労働と言語とともに発生した現象であることが否定され、たんなる筋運動にまでひきさげられる。このような機械論的思考観はなにをみちびくか。それは、それ自体、必然的に二つの矛盾をみちびく。

第一に、思考が筋運動にひきさげられるということは、逆にいえば、筋運動が思考にまで「高められる」こと、すなわちここでこつそりと物活論が導入されることを意味する。ワトソンは主張

する。人が思考するとき、かれの高次神経系、とくに大脳皮質が活動しているとみるべきでなく、身体組織全体が活動しているとみるべきである。「われわれは、ときには、手、口唇、内臓の各組織を同時に使って思考する。ときには口唇組織だけを、ときには内臓組織だけを、またときには手の組織だけを使って思考する。」また「思考活動は言葉がなくても相当のあいだつづけられる⁽¹⁴⁾」というのである。脳髓がなくても、口唇が、手が、内臓がかわりに思考してくれる(一)というのである。また言葉がなくても、思考がおこなわれるというのである。これは、観念論ではなからうか。まぎれもない観念論であり、しかも観念論のうちで一番おそまつな物活論である。

第二に、思考とは筋運動だというワトソンのテーゼは、皮肉にもワトソン自身に齒むかってゆく。というのは、われわれがワトソンの著書を読むとき、かれの思考ないし思想を学ぶのではなく、実はかれの言語器官の動きないし筋運動を学んでいるにすぎないことになり、したがってそれが真理かどうかということもまったく無意味になってしまう。それは、ワトソン個人の筋運動にすぎないゆえに、普遍性をもちえず、したがって行動主義という学説も存在理由をもたないことになる。いまや、ワトソンの学説もふくめて普遍的な学問は存在せず、あるのは無数の人々の無数の筋運動だけであり、各人各説ということになる。みられるように「客観的心理学」を自称した行動主義は、皮肉にももっとも主観

的な観念論、独在論にゆきつかざるをえないのである。

前述のように、行動主義は、第一の論法として旧来の主観的心理学を「革命的」に批判し、第二の論法として客観的心理学を主張した。ところがつぎに、行動主義の第三の論法がでてくる。すなわち「古い心理学」として「克服」し「追放」したはずの主観的心理学ないし観念論を、こんどは、こっそり裏口から密輸入してくることである。この主観主義はつぎの二つの点にあらわれている。

その第一は、われわれは、発声器官の筋習慣が形成されると、たえず「独り言」(talking to ourselves)をするというワトソンの主張である。そしてこの「独り言」こそかれによれば「思想」にほかならない。思想とは客観的実在の脳髓への反映ではなく、また社会的産物でもなくして、「独り言」にすぎず、喉頭を形成する軟骨群の機能にほかならない⁽¹⁵⁾。かつて、プラグマティズムないし論理実証主義の創始者、チャールズ・S・ピアスは、思想とは「独り言」だといって現代観念論の源流となったが、ワトソンはこのピアスの独在論を心理学において復活しているのである。

その第二は、ワトソンの「思考経済説」——正確には「身体経済説」——にあらわれている。くりかえしのべたように、思考とは筋習慣にほかならなかった。そしてこの筋習慣の新しい結合ができ、新しい複合がうまれると、新しい置換がとってかわる。たとえば、肩をすくめたりする身体反応が言葉にとってかわられ

る。そして言葉とは、時間と能力を節約するために身体反応ならびに対象にとってかわる「身体経済」(Body Economy)にすぎない。かれはのべている。

「いろいろの対象にたいして、集団のすべての成員に共通の言葉をおきかえるよう集団から協力をうることは、時間と能力の経済という点で大きな意味をもっている。

人間はまもなく、理論上、世界のあらゆる対象にとってかわる口唇的置換物を自己のうちにもつことになる。その後、この「口唇的置換物の」組織によって世界を携帯するようになる。そして人間は、ひそかに自分の部屋や暗床の中、この言葉でできた世界をたくみに操ることができるようになる。……われわれは、この世界を、現実の身体組織として、喉頭部や胸などの筋や腺組織(もちろん筋の感覚器官や神経系をふくめて)のうちにならずさえるのである。⁽¹⁶⁾」

かつて、エルンスト・マッハ、そしてのちにジェームスは、「思考経済の原理」を認識論に導入して、主観的観念論への道をひらいたが、ワトソンのやろうとすることは、「身体経済の原理」を心理学に導入して、心理学を一層観念論化することである。なるほど「思考」のかわりに「身体」という言葉がつかわれており、「客観的」心理学だと自称してはいる。しかしこのことは、行動

主義が唯物論的であるとか客観的であるとかいうことをすこしも意味しない。反対に、これは行動主義の独在論とその粗雑さをしめすにすぎない。われわれは、世界を喉頭や筋や腺のなかに携帯し、ベッドの中で操作することができる！ こういつてワトソンが自慢する行動主義は、ほかならぬ「行動」を重視することによってとくに実践的であるようにみえるが、実際はもっとも非実践的なイデオロギーであり、利子生活者の心理学である。それは、マクドゥガルの言葉をかりれば「うまれつき怠け者に魅力的な見解⁽¹⁷⁾」にすぎない。世界はわたくしの身体のうちにあると主張する行動主義は、主観的観念論のうちでも一番おそまつな独在論であり、しかもバークリよりもっと粗雑な肉体的独在論にほかならない。ワトソンの行動主義を継承したG・H・ミードさえ、行動主義が結局、独在論にゆきつかざるをえないのを見とめなければならなかった。⁽¹⁸⁾

(二) プラグマティズム

すでにみたように、一九一二年にはじまったワトソンの行動主義は、旧来の心理学を根底よりくつがえし、さらに他のすべての諸科学に「革命」をおこしたかのようにみえた。しかし、それはけっして「新しい」心理学ではなく、実はかれが克服したはずの「古い」心理学を「新しい」装いをつけて再建したものにすぎない。マクドゥガルはのべている。

「ワトソンらは、われわれが科学者でなく中世の形而上学者だとかんがえている。しかし実際は、無意識のうちに形而上学的仮定や偏見で出発するものは、ほかならぬワトソン博士、ロエブ教授、ならびにその追隨者である機械論者なのである。そしてこのような偏見が、かれらのあらゆる考えを彩り、かたちづくり、制限している。時代おくれになって前世紀の形而上学のなかをさまよっているのは、ワトソンらなのである。」⁽¹⁹⁾

ワトソンがかの目的論的心理学者マクドゥガルを「中世の形而上学者」だと非難するとき、これはまったく正しい。しかしこの非難は、実はそのまま機械論者ワトソン自身にもあてはまるのであって、そのかぎり、われわれはマクドゥガルのこの抗弁に全面的に同意することができる。

われわれは、叙述の便宜上、さきに行動主義の成立をワトソン個人と結びつけて説明した。しかし、このように「内観的方法」を「排除し」「客観的」心理学をうちたてようという主張は、ワトソンの独占物ではなかったことを忘れてはならない。このような見解ならすでに前世紀前半、フランスの実証主義者、オーギュスト・コント、A・クルノーらによって主張されていたところである。⁽²⁰⁾ それほけつして新しい主張ではなく、とくに前世紀末、世界資本主義が帝国主義段階に到達してのち、ブルジョア・イデオロギーにおいて支配的になった実証主義的傾向の一つである。生物学では、

J・ロエブ、T・C・ベール、J・P・ヌエル、A・ベータ、フオン・ウェクスキュルらが行動主義への道をひらき、⁽²¹⁾ また心理学では、M・F・マイヤー、K・ダンラップ、B・H・ボード、E・B・ホルト、A・P・ワイズ、E・L・ソーンダイク、ヴェ・ベヒチェレフらは、ワトソンとは独立に、あるいは先んじて、それぞれ行動主義心理学、ないし「客観的」心理学を主張した。⁽²²⁾ こうして、一九一二年、アメリカでワトソンがはじめて行動主義を提唱する講演をのべたとしても、それはワトソンの「天才」に負うものではけつしてない。ポーリングがのべたように「ワトソンが行動主義をうちたてたのは、あらゆることがそのように準備されていたからである。そうでなければ、かれはうちたてることができなかつたであろう。ワトソンは哲学的には無能だつた」⁽²³⁾ からである。要するに行動主義は、ワトソン個人の主張ではなく、一般的には帝国主義段階のブルジョア・イデオロギーに支配的な実証主義的傾向の必然的産物である。ワトソンがいなかつたとしても、それはかならずうまれざるをえなかつた運動なのである。

さて、くりかえしのべたように、行動主義は「内観」という方法を否定し、「客観的」心理学をうちたてたようにみえた。また、ジュームス・デュリーのプラグマティズム心理学ないし「機能的心理学」(Functional Psychology)に反対し、これを「克服」して唯物論的心理学を創始したようにみえた。しかし、それにもかかわらず、行動主義は、実は一般的にはアメリカ・イデオロギー、

特殊的にはプラグマティズムの派生物であり、後者と表裏の関係をなすことに注意すべきである。

プラグマティズムならびにその心理学についていえば、その性格は「活動」「功用」「実用性」という言葉でもっともよく特徴づけられることができる。それはすでにアメリカに移住していたドイツ系心理学者、H・ミュンスタールベルヒによって先鞭をつけられていたが、とくにジェームスの大著『心理学原理』（一八九〇年）において体系化され、デューイの論文『心理学における反射弧の概念』（一八九六年）において、はっきり「機能主義」(Functionalism)という主張となった。機能主義とはなにか。それは、人間の心理をとくにその「機能」の観点、いいかえればその「使用」の観点から説明しようという主張である。デューイはかんがえる。人間の思考とは、ある目的にたつための道具であって、一つの継続的な連鎖をなしている。刺激が反応をうみだすように、反応も刺激に作用する。思考は、一つの全体的な「反射弧」を形成している。そして生物体が環境に適応していかないときにのみ、刺激―反応―刺激―反応……という「反射弧」が形成され、この連鎖はつづくのいい習慣が形成されるまでつづくのである。思考は生物体にとっての機能であり、生物体の活動を「節約」するためのものだというのである。⁽²⁴⁾ みられるとおり、機能主義は、思考、行動、習慣を完全に混同している。そして一見したところワトスンほど機械論的ないし要素論的ではないが、思考ないし意識が「意識され

た存在」であり、客観的な実在の反映であることを無視し、たんなる生物体の道具だとみなして、事実上、意識を否定しているのである。

こうして、行動主義者は、しばしばプラグマティズムないし機能主義の主観主義を非難し、またプラグマティストは、行動主義の「素朴唯物論」を非難したが、両者は、実は同じ思想の表裏にすぎない。事実、ジェームスは、はやくも一九〇四年、ワトスンに先んじて、『意識』は存在するか？』という論文を発表し、「思考の流れとは、よくみると、主としてわたくしの呼吸の流れにすぎないものにつけた不注意な名前にすぎず」、意識とは「虚構」であり、思想は事物と同じ原料でできていると断言した。⁽²⁵⁾ またデューイ自身も、「道具主義」と行動主義の密接な関係をみとめ、「道具主義に影響をおよぼした心理学的傾向は、生理学的というよりもむしろ生物学的性質をもっている。道具主義は、心理学においてジョン・ワトスン博士が創始して行動主義と名づけた重要な傾向としっかり結びついている」⁽²⁶⁾とのべた。同様のことはワトスンの側からいうことができる。ワトスンが機能主義を批判したとしても、それはかれが機能主義の観念論の本質に反対し、客観的・科学的な心理学を主張したからではけっしてない。逆に、ワトスンは、機能主義を徹底化することをさえ要求した。機能主義的心理学を徹底化することをさまたげているもの一つは平行論的仮説である。こういつてかれは、「行動主義こそ、唯一の徹底的・論理

的な機能主義である」⁽²⁷⁾と主張したのである。

このようにみてくると、行動主義がたんなるワトスン個人の心理学的主張ではなく、実は帝国主義段階の主観的観念論哲学ときわめて密接にむすびついていることがわかるだろう。いまやわれわれは、プラグマティズムを無視して行動主義を批判することはできず、また行動主義の批判をしないでプラグマティズムを批評することはできない。しかもこのようなプラグマティズムと行動主義の関係は、現代アメリカ・イギリスの観念論哲学の一つとして、プラグマティズムについて流行している「新實在論」にもあてはまる。この学派の代表者は、E・B・ホルト、W・T・マーヴィン、W・P・モンターグ、R・B・ペリらであるが、かれらは、行動主義にもとづいて、自分の哲学を唯物論的・實在論的であるようにみせかけている。とくにホルトとペリは、ジェームスのさきあげた論文やヘルムホルツその他の生理学的観念論者の論文を援用して、マッハ主義の行動主義的変種をつくりだした。そしてさらに行動主義は、B・ラッセルの哲学の土台として利用されたのである。⁽²⁸⁾

われわれはいま、行動主義が現代の主観的観念論哲学の主要な諸流派としっかりむすびついているといったが、それはさらに現代の観念論的心理学の主要な諸流派とも表裏の関係になっていることをつけくわえなければならぬ。たしかに、行動主義は、フロイト主義やゲシュタルト心理学の主観主義・非科学性をはげ

しく批判し、また後者は前者の「素朴唯物論」をきびしく非難した。しかしそれにもかかわらず、それらは、近年とくに「新行動主義」「新フロイト主義」「フィールド理論」という方向でますます接近し、たがいに折衷しあっている。すでにワトスン自身が「ゲシュタルト」理論の萌芽を内にはらみ、機械論的立場をつらぬくと自称しながら目的論的な「誘因」(Incentive) という概念を導入しなかつたであらうか。⁽²⁹⁾ またフロイト主義的な考えかた(「エディプス・コンプレックス」の概念その他)や「療法」を「部分的」に承認することを公言しなかつたであらうか。⁽³⁰⁾ まさにそうだったからこそ、ワトスンの後継者たち、すなわちG・H・ミード、F・H・オルポート、W・S・ハンター、K・S・ラシユレーらは、「ゲシュタルト」やフロイトの諸概念、マクドゥガルの本能論をきそつて「とりいれた」のであり、また最近の「新行動主義者」C・L・ハル、E・C・トールマン、C・T・モルガンらは公然と、「本能」「衝動」「ゲシュタルト」の概念を導入し、また「内観的方法」を採用しているのである。⁽³¹⁾

実際、二〇世紀の観念論的心理学者のうちで、ワトスンの行動主義をはげしく「非難」しなかつたものはほとんどいない。しかし、皮肉にも、同時にみづからをワトスンよりもっとすぐれた「行動主義者」だと自称しなかつたものもほとんどいない。ワトスンとはげしくわたりあつたマクドゥガルさえ、ワトスンのそれと区別して自分の心理学を「健全な行動主義」と名づけ、「ワトス

ンよりもむしろわたしの方が根元的な行動主義者である⁽³²⁾とほこつたのである。

みられるとおり、現代の観念論的心理学の諸流派は互いに対立しあいながら折衷しあっており、完全なアナーキーにおちいつている。だがこのアナーキーは偶然にうまれたものであろうか。いや、実は、このアナーキー状態は現代ブルジョア心理学の観念論と形而上学的方法の必然的産物にすぎない。実際、心理学における機械論といい、目的論(生氣論)といい、たがいはげしく非難しあっているけれども、本当は同じ観念論的世界観、形而上学的方法、生物学主義の両極端にすぎない。⁽³³⁾機械論にたつかぎりそれはかならず不可知論におちいり、「本能」「衝動」という概念を導入せざるをえないのであり(Deus ex machina)また目的論ないし生氣論といえども、自らを科学的に偽装するために、かならず機械論に依拠せざるをえないのである。

(三) 「実 践」

われわれは以上において、行動主義心理学の理論構造とその哲学的背景について若干の分析をくわえた。しかし、さらに注意しなければならぬのは、このような機械論的心理學が、実はただちに「実践的」「実用的」な意味をもつことである。それは厳密に科学的な客観的心理學ではなく、まして条件反射理論でもなくして、ワトソン自身の表現によれば「手軽で役に立つ實際的心理

學」にすぎない。かれはいつている。

「もしわれわれが、多かれ少なかれ確信をもって反応を予知することができず、刺戟からおこりうる結果がわからないなら、どうして社会生活をすることができるであろうか。他人を観察すればするほど、ますますいい心理學者になれる。ますます他人とうまくやることができるようになる。より健全な適応生活をやってゆくための努力の半ばは、人々とうまくやることができるといふこの能力に負うている。實際的心理學を学ぶためには、…条件反射學徒になる必要さえないのである。⁽³⁴⁾」

かくして行動主義は、たんに「いい結果をうるための近道をもとめるアメリカ的天才」⁽³⁵⁾の産物であり、どのように「人々とうまくやることがゆかか」、どのようにうまくこのブルジョア社会に「適応」するかを説教する処世術にすぎない。それは、「本質的にアメリカ的であり、生存競争の必然にたいする信仰と合致する心理學⁽³⁶⁾」である。それは、とくに帝国主義段階にたつたアメリカ社会の産物であり、そのイデオロギーであつて、つぎにみるようにアメリカ独占資本家のもつとも露骨な「実践的」宣言である。

行動主義の第一の「実践」は、労働者を「刺戟—反応」の連鎖でうごく「筋肉機械」とみなし、この意識をもたぬ「筋肉機械」を資本家にとつてもつとも効果あらしめんとすることである。

ワトソンはかんがえる。人間というものはなまけものであってその同僚とつきあうのに適当なほどの収入をうるようになる、進歩をやめてしまう。「できるだけ仕事を少くし、できるだけだらしなくすることが、今日、大抵の工場の合言葉になっている。監督であれ、フォアマンであれ、手工労働者であれ、労働者は、『わたしは自分のために働いているのではない。会社の奴隷になって、自分の仕事からうまれる利潤を他人にとられてたまるか』と合理化している。」こういって、労働者が「なまけている」とこぼすワトソンは、「刺戟」をあたえると労働する「反応」を、労働者に条件づけること、すなわち、労働者のうちにとくに若いあいだに「労働習慣」をうえつけることを提唱する。「青年期における初期の習慣の形成、他人よりも長時間勤務しようという習慣の形成は、どんな方面でも成功をもたらす。」⁽³⁵⁾こうして「人間機械がなんの役に立つかということのを、またその将来の能力等について有用な予言をすること」⁽³⁶⁾が、行動主義者の「科学的任務」の一つになる。そしてワトソンは、「作業機械」としての人間の筋はどれほど「能率的」かを研究して、これを蒸気機関と同じほど「能率的」だと主張し、また労働者を自動車と同じように「まさに走らんとする組立てられた有機的機械」だと説明したのである。⁽³⁹⁾

ごらんのように、行動主義は、資本主義社会において、労働者が肉体的にも心理的にもいかに畸形化され、非人間化されているかをあきらかにする科学ではなく、反対に労働者を「人間機械」

にひきさげ、この「機械」を独占資本家の最大限利潤追及のためにもっとも「能率的」なロボットにしようとする「心理学」である。かつて、デュローイのプラグマティズムは、フォード・システムを弁護する「哲学」になったが、ワトソンの行動主義は、⁽⁴⁰⁾テーラー・システム、フォード・システムの「心理学」であり、いま流行の「生産性向上運動」の「心理学」にほかならないのである。行動主義の第二の「実践」は、厳密に「生理学的」であつたはずの「刺戟—反応」のパータンを「社会学」の分野に拡張し、社会現象を生産力と生産関係の矛盾、客観的な社会法則によってではなく、粗雑な「刺戟—反応」によって「説明」することである。ワトソンはかんがえる。あらゆる社会的条件は、一つの試行錯誤的な「実験」にほかならず、この「社会的実験」は、二つの論理的手続きによっておこなわれる。その一つは、ある「刺戟」(S)をあたえると、いかなる「反応」(R)がおこるかという考え方であり、他の一つは、社会にある「反応」(R)をおこさせるためには、どのような「刺戟」(S)をあたえればよいかという考え方である。こういって、たとえば第一の論理的手続きにもとづき、ワトソンは、社会にある「刺戟」(S)——その例として、かれは、ソヴェト政権の樹立、戦争、禁酒法、離婚の簡易化、富の均等化、遺産相続の廃止等をあげている——をあたえると、どういふ「反応」がおこるか、行動主義的に理解しようと提唱する。だが、このような粗雑な「生理学的社会学」ないし

「社会心理学」では、社会現象はすこしも説明されず、せいぜい社会不可知論、そしてさらに反動主義にゆきつくだけである。これによれば、ロシア革命とソヴェト政権の成立は、実は盲目的・試行錯誤的な「実験」にすぎないのであって、革命側も反革命側も、どんな「反応」がおこるかを予知できなかった。そしてソヴェト政権の成立という「刺戟」をあたえた結果、その「反応」として、「ロシアの産業上の進歩が台なしにされ、ロシアの知的・科学的進歩がなげすてられた」⁽⁴²⁾そうである。実際、「生理学」を社会現象にあてはめるとき、それはかならず社会と歴史を漫画化し、反動主義をもたさざるをえない。別の著書では、ワトソンは、ロシア革命がおこったのはロシア人が多量のアルコールを飲むからだという主張に賛成しているのである。⁽⁴³⁾

行動主義を社会現象に「適用」して、社会主義革命を漫画化したワトソンは、その同じ行動主義によって社会の組織化、統制化をとく。「行動主義心理学は、……その問題を系統発生的にとらえ、単純からより複雑なものへとすすみ、刺戟にもとづく反応、反応の基礎をなす刺戟についての豊富な知識をあつめ、社会にはかりがたい利益をもたらす。行動主義者は、その科学が社会の組織化と統制化の土台をなすと信じ、社会学がその原理をうけいれ、より具体的にそれ自身の問題に直面することをのぞんできた。」⁽⁴⁴⁾うたがいのなく、行動主義は、資本主義社会の組織化・統制化、いいかえれば「組織された資本主義」の弁護論になっているので

ある。

こうして、つぎに行動主義の第三の「実践」がでてくる。すなわち、行動主義的方法を「教育」「倫理」「懲罰制度」に「適用」し、「善良」である行動主義者の指導の下、「組織社会」(Organized Society)をうちたてることである。ワトソンは主張する。いままで、家庭や学校で子供を育てるとき体罰を課してきたが、この叱り方はけっして「科学的」ではなかった。というのは、多くのばあい、子供がいたずらしてから数時間たったのちに鞭をあてていたが、このようなやり方では、いたずらをやらないような「条件反応」を形成できない。「条件反応」を形成するためには、子供がいたずらをするのと同時に、叩かねばならない。また、子供がガラスやかわれやすい物に手をのばすときには、これに電流を通して電気衝撃(！)をあたえねばならない。こういって、子供にたいする「懲罰体系」を「科学化」したワトソンは、この方法を大人の懲罰にも適用すべきだと主張する。つまり、狂人や精神病患者でなくとも「社会的無訓練者」は、その年令・職業の如何をとわず、訓練場に収容し、教養を身につけさせて、社会化されねばならず、必要な「訓練」を身につけない連中は、いつまでも「訓練」をやりなおして労働を課し、脱出できないようにしなければならぬ。このような「訓練」は、十年ないし十五年あるいはもっと長くかかるだろう。「一日、十二時間の重労働は何人をも害わないだろう。かくして余分に訓練をすべき連中は、もちろん行動主義

者の手にまかされねばならない。」そしてこのようにすれば、犯罪者はいなくなり、したがって刑法も弁護士も法律家も不必要になるだろう。(行動主義者のノートピア!) だが「警察制度は廃止されない(45)」「あきらかに、ワトソンは強制収容所の設立、警察国家の樹立を説教しているのである。

いまやワトソンにとって大切なことは、大人の「懲罰」に適用された行動主義の原則を、たんに一代だけでなく、末永く子孫にまで適用して「組織社会」を永遠化し、完成することである。そこではもはや「言論の自由」をゆるすことはできないとかれはいう。なぜなら、言論とは筋運動にほかならず、したがって筋運動の自由など無意味だからである。そしてかれは結論する。

「わたくしは、諸君にたいしある刺戟、ある口唇刺戟を提出しようとしている。この刺戟は、もしそれに反応すれば、この宇宙を徐々に変化させるだろう。というのは、もし諸君が自分の子供を自由思想家の自由においてでなく、行動主義的自由(?) においてわれわれはこれを言葉でいいあらわすこともできず、ほとんどわかってもいない——において教育するならば、宇宙は変化するであろう。これらの子供は、よりよき生活様式と思考方法でもって、われわれにかわって社会をつくり、かれらの子供をさらに科学的方法で教育し、世界はついに人間の生活に最適のところとなるであろう。」(46)

たしかに「言論の自由」を禁止してワトソン自身も表現できないような「行動主義的自由」(?) で子供たちを教育すれば、その世界は「人間の生活に最適のところ」になるかもしれない。だがこのような「人間」とは、けっして勤労者階級ではなく、労働者や子供を「人間機械」とみなし、これを操作するほんのわずかの独占資本家、ファシスト、そして「選良」である行動主義者だけであろう。

かつてファシズムに「反対」したデュリーのプラグマティズムが皮肉にもマッカーシズムの「哲学」になったように、また、ヒットラーに「追放」されたフロイトの精神分析がマッカーシズムの「心理学」になったように、(47) ワトソンの行動主義のゆきつくところもマッカーシズムの激励である。デュリー、フロイト、ワトソンらは、その理論構造において一致するだけでなく、実にその政治目的においても同盟しているのである。

- 註(1) J. B. Watson, *Behaviorism*, N. Y., 1924, pp. 5—6.; Watson and W. McDougall, *The Battle of Behaviorism*, N. Y., 1929, pp. 14—16.
 (2) A. A. Roback, *History of American Psychology*, N. Y., 1952, p. 225.
 (3) Watson and McDougall, *op. cit.*, p. 94.
 (4) Watson, *Behavior, An Introduction to Comparative Psychology*, N. Y., 1914, p. 1.
 (5) Watson and McDougall, *op. cit.*, p. 26.

- (6) Watson, *Behaviorism*, pp. 43, 54.
- (7) Watson and McDougall, *op. cit.*, p. 32.
- (8) *Ibid.*, p. 20.
- (9) *Ibid.*, p. 33.
- (10) Watson, *Behaviorism*, p. 15.
- (11) V. J. McGill, "The Mind-Body Problem in the Light of Recent Psychology," *Science & Society*, Fall, 1945, pp. 336—337.
- (12) Watson, *op. cit.*, p. 105.
- (13) Watson, *Psychology from the Standpoint of a Behaviorist*, Philadelphia, 1929, p. 365.
- (14) Watson, *Behaviorism*, p. 214.
- (15) *Ibid.*, pp. 191—192.
- (16) *Ibid.*, p. 187.
- (17) Watson and McDougall, *op. cit.*, p. 42.
- (18) G. H. Mead, *Mind, Self and Society from the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago, 1934, pp. xviii, 3.
- (19) Watson and McDougall, *op. cit.*, p. 76.
- (20) Roback, *op. cit.*, p. 229. ノトメンの行動主義を「ト・メトリイの『人間機械論』をはじめ、一八世紀のフランス唯物論者の見解と同一視し、前者は後者の唯物論的伝統をうけついでものだという主張がある。たとえば、現代フランスの自称「マルタス主義者」ビエール・ナヴァールはそう主張してゐる。(Cf. P. Naville, *Psychologie, marxisme, matérialisme*, Paris, 1948, pp. 114—115, 124.) この見解は正しくない。わたくしは正しくないとかんがえる。第一に「ラ・メトリイはすべれて唯物論的であつたが、ノトメンは実際は粗雑

な独在論者であり、第二に、前者は人間の思考をけつして無視せず、ビエールマニスムに立脚した進歩的イデオログであつたが、後者は反ビエールマニスム的な反動イデオログだからである。

- (21) Roback, *op. cit.*, p. 229.; E.G. Boring, *A History of Experimental Psychology*, N. Y., 1929, p. 581.
- (22) Roback, *op. cit.*, pp. 226—228.
- (23) Boring, *op. cit.*, p. 494.
- (24) *Ibid.*, pp. 540—541.; Roback, *op. cit.*, p. 213.; Boring, "The Influence of Evolutionary Theory upon American Psychological Thought," in *Evolutionary Thought in America*, ed. by S. Persons, New Haven, 1950, p. 277.
- (25) W. James, "Does 'Consciousness' Exist?", in *Essays in Radical Empiricism*, London, 1912, p. 37. 尚、このよみな見解は、同じ頃、アメリカの E・A・シムガー、フランスの V・E・ホムボ、オーストリアの S・シュリッカーなども主張したところであつた。そのことについては、この本を参照せよ。
- (26) J. Dewey, « Le développement du pragmatisme américain », *Revue de Métaphysique et de Morale*, Tome 29, 1922, p. 423. (И.Лингарт, Американский прагматизм, Москва, 1954, стр. 148. 以下参照。) 行動主義とプラグマティズムとの密接な関係については、この本は、くわしくふれなからぬ。この本は、この本を参照せよ。 Dewey, *Human Nature and Conduct*, N.Y., 1930, Modern Library Edition, pp. 25, 30—33, 69, 183.; Ph. Wiener, *Evolution and the Founders of Pragmatism*, Camb., 1949, pp. 164f., 198.; B. Russell, *Analysis of Mind*, London, 1922, p. 26 f.; Лингарт, там же,

- срр. 25—26, 158—166.
- (27) Watson, *Behavior*, p. 9.
- (28) R.B. Perry, "A Realistic Theory of Independence," *New Realism*, N.Y., 1912, pp. 99—151.; E.B. Holt, "The Place of Illusory Experience in a Realistic World," *New Realism*, pp. 303—373.; Russell, *op. cit.*, Preface, Chap. I, II, X. 尚'さきにふれたナヴィルは行動主義を新實在論ないしプラグマティズムから峻別し、前者は唯物論的で科学的だが、後者は観念論的で非科学的だといつてゐる。(Neville, *op. cit.*, pp. 116—122.) わたくしはこれは正しくなうとかんがえる。これらの思想はいづれも同じマッハ主義の変種なのである。
- (29) Watson and McDougall, *op. cit.*, pp. 23—24, 69.; Watson, *Psychology*, p. 420.
- (30) Watson and McDougall, *op. cit.*, pp. 11—12.; *Behaviorism*, pp. 209, 241.
- (31) Roback, *op. cit.*, pp. 242, 254, 270—273.
- (32) Watson and McDougall, *op. cit.*, pp. 48—49.; Roback, *op. cit.*, pp. 255—256.
- (33) Cf. I. Pavlov, *Oeuvres choisies*, Moscou, 1954, p. 162.
- (34) Watson, *Behaviorism*, p. 39.
- (35) Watson and McDougall, *op. cit.*, p. 43.
- (36) Boring, "The Influence," p. 288.
- (37) Watson, *Behaviorism*, p. 171.
- (38) *Ibid.*, p. 218.
- (39) *Ibid.*, pp. 55, 216.
- (40) J. Dewey and J. H. Tufts, *Ethics*, N.Y., 1952, p. 472.

- (41) Краткий философский словарь, 1954, срр. 53—54. ここでかんとんに日本における行動主義の輸入と普及についてふれておきたい。わが国における行動主義心理学のもつとも大きな特徴は、とくに第一次世界戦争の前後より、一方では海軍の適性検査という軍事目的、他方では「能率増進」「労働合理化」という資本の要求と結びつき、テラーやギルブレスの「科学的管理法」の紹介としっかり結びついて流行したところである。その代表的なものは、松本亦太郎、千輪浩、田中寛一、上野陽一、神長倉貞民の諸氏であつて、いづれもアメリカの行動主義者ないし擬似行動主義者、ミュンスターベルヒ、ソーンダイク、ワトソン、ドッジ、キャテルらをよりどころにした。「すでに行動主義心理学があるとすれば、これをさらに實際生活にたいする人間の動作に関係せしめるとき、そこに人間工学 (Human Engineering) の組織発達をみるのである。」(田中寛一『人間工学』、大正一四年版、四ページ。)このように、行動主義心理学の流行は大正時代以来、「人間工学」「精神工学」「科学的管理法」などとして結びつてゐた。(他の資料としては、上野陽一『能率の心理』、大正八年版、九ページ以下、一九ページ以下。神長倉貞民『能率学講話』、大正一三年、一八三ページなどをみよ。)そしてこれらの「人間工学」ないし「精神工学」は、最近、新しくみえる「パブリック・リレーションズ」「ヒューマン・リレーションズ」という偽装をつけ、また「フィールド」理論やフロイト主義にたつ社会心理学と結合しつつ、現在、わが国の「生産性向上運動」の一環として、きわめて有害な役割をはたしてゐる。とくに重視すべきは、たんに労働者を肉体的・技術的に消耗させるだけでなく、一つのイデオロギー的力として抑圧して

ゐることであつて、この点については別の機会にくわしく批判する必要がある。

- (42) Watson, *op. cit.*, p. 37.
- (43) Watson, *Psychology*, p. 394.
- (44) Watson, *Behaviorism*, p. 38.
- (45) *Ibid.*, pp. 146—147.
- (46) *Ibid.*, p. 248.
- (47) くわしくは、拙稿『プラグマティズムの批判』、『マルクス・レーニン主義研究』六号。『社会心理学の批判』、『社会労働研究』四号。

二、行動主義社会心理学の批判

われわれは前章において、行動主義心理学の理論講造と哲学的背景ならびにその「実践」についてのべた。それは、一九世紀後半にはじまる実証主義的運動の一環として、最初、主として下等動物の研究より出発して、動物心理学として成立し、その後、生理学の研究成果を利用して一つの心理学的主張となつた。ワトソンその他の行動主義心理学を特徴づけるものは、なによりも「生物学主義」・「生理学主義」であり、またかれの自称によれば「自然科学」の一部門としての個人心理学である。

ところで、ここで注意しなければならぬのは、行動主義心理学のこのような「生物学主義」・「生理学主義」が、その一見「科学的」な性格によつて、またその機械論的論理によつて、ただちに社会現象に「拡張」され、「社会学主義」にならざるをえな

かつた事実である。それは、人間の行動を厳密に「客観的」に研究すると提唱したかぎり、旧来の社会心理学の諸流派、とくにル・ボン、タルド、シゲール、マクドゥガルらによる主観主義的な解釈や陳腐な同語反覆的な「説明」にとつてかわり、社会現象を理解するうえでも真に科学的な方法を提供するようにおもわれた。行動主義者たちは主張した。人々は、人理の心理を研究するばあい、抽象的な意識や神秘的な本能をではなく、人間が実際やっていることを研究すべきである。また、人間の生まれつきの傾向はきわめて変容しやすいものであるから、人間にたいする環境つまり「社会」の影響に注意すべきである。すなわち、社会行動がおこる条件を厳密にコントロールし、科学的記述、つまり普遍的同意が達せられるような観察だけをあつかうべきである。こうして、行動主義者は、「社会的反応にふくまれる正確に生理学的な証明可能の心理学的变化に関心をかけた。しかし、かれらの方法の基本的公理の概念は変化しないままであつた。すべて、これらの試みの背後には、たんなる個人間の社会的関係にかんして機械論があてはまるといふ信念があつた。そしてこの社会的関係は、⁽¹⁾「たび理解されるや、社会心理学の構成の土台石となるとされた」のである。行動主義者は、社会(全体)は個人(部分)の合計によつて説明され、二つの集団の行動は個人心理にもとづいて説明されるとかんがえた。つまり、二人の個人間に葛藤があるとき、この心理的・生理的諸条件を理解すれば、社会的矛盾(戦争、階級闘

争その他)がおこる諸条件がわかるというのである。行動主義の「生理学主義」は「社会学主義」になり、その個人心理学は社会心理学になったのである。⁽²⁾

わたくしは、ブルジョア心理学における「社会心理学」の成立が、どのようなイデオロギー的・政治的意味をもっているかについては、他の論文でくわしくのべたので、ここではくりかえさない。ただ、プラグマティズムやフロイト主義におけると同様、行動主義における社会心理学もまた、ほかならぬ第一次世界戦争と十月革命の直後、いちぢるしい「発展」をとげたことに注意したい。それはすでにワトソン自身によって先鞭がつけられていたが、アメリカではとくに、F・H・オルポート『社会心理学』(一九二四年)、L・L・バーナード『社会心理学序説』(一九二六年)、G・H・ミード『精神・自我・社会』(一九三四年、遺稿)、ソ同盟ではヴェ・ベヒチュレフ『集団反射学』(ロシア語版、一九二一年。ドイツ語版、一九二八年)などによって体系化された。⁽³⁾

もちろん、これらの行動主義社会心理学の提唱者の間にはいろいろニュアンスの相違がある。オルポートのそれが個人心理学的色彩のつよい社会心理学であるとすれば、ミードのそれはワトソンを「克服」した社会心理学であり、「コミュニケーション」理論と社会哲学の方向に つよい傾斜をしめしている。バーナードのそれが主として反本能主義、反マクドゥガルの色彩が つよいとすれば、ベヒチュレフのそれは、革命前のロシア版「社会心理学者」

ボグダーノフ流の機械論にもとづき、「集団反射」という生物学的・物理学的な一種のエネルギー論によって社会的・政治的・経済的現象を説明しようとしている。そしてこれらのほかに、多少の距離をおいて、ジョン・デューイの機能主義的・行動主義的な社会心理学、すなわち「人間性と行為——社会心理学序説」(初版、一九二二年)がある。わたくしはここでは、これらすべてについてふれることができないので、主としてF・H・オルポートを中心的にとりあげ、行動主義社会心理学の本質をあきらかにする。

(一) 理論構造

行動主義社会心理学はどういう理論構造をもっているか。行動主義社会心理学の第一の論法は、旧来の社会心理学にたいする「徹底的」な批判である。周知のように、社会心理学が欧米の思想界に登場したのは、とくに一九世紀末、労働運動・社会主義運動の昂揚を背景としてであった。それは、なによりも、ストライキ、街上の騒擾、大衆行動の研究と批判より出発し、これを「群集心理」によって説明しようとしたところからみた。社会心理学は、一方では、ル・ボンの『群集心理』(一八九五年)、タルドの『輿論と群集』(一九〇一年)以来、大衆行動の「非合理性」を多く「群集心理学」として、他方では、マクドゥガルの『社会心理学序説』(初版、一九〇八年)以来、非合理的な本能主義心理学として登場した。

ル・ボンは主張した。群集の特徴は、群集を構成する個々の人間がどんな種類のものであれ、またどんな性格、職業、知性をもとうとも、群集ないしモップに変形される点にある。人々は、群集を形成するとき、「集合精神」をもつのであって、そのため、かれらが一人で感じたり、かんがえたり、行動するばあいとは、まったくちがったやりかたで感じ、かんがえ、行動する。群集においては、個人の理性・個性は消失し、無意識的な幽霊のような「集合精神」が支配するといふのである。⁽⁴⁾ 他方、マクドゥガルは主張した。人間のあらゆる活動の原動力は「本能」であつて、この本能の衝動力によつて、思想が生まれ、またあらゆる身体活動が発動される。本能は、個人ならびに社会のあらゆる生命を維持し形成する生物的・精神的力であり、ここにこそ、生命、精神、意志の「神秘さ」がある。本能が社会現象説明の鍵だといふのである。⁽⁵⁾ ル・ボンといひ、マクドゥガルといひ、その細部では異つてゐるが、いずれも、社会、大衆運動、ならびに心理現象の合法性を否定し、これを非合理的な存在だとしたのである。

だが、このような非合理主義的社会心理学は、一見してあまりにも非科学的であり、常識的にもばかけていたので、ブルジョア心理学のもう一つの傾向、すなわち実証性と「科学性」を自負する行動主義の側から、激しい非難をあげせられねばならなかつた。F・H・オルポートは非難した。

「若干の著者たちは、社会行動の密接な結びつきと相互的性質に感銘して、集団を構成する諸個人の精神からきりはなされた一種の『集合精神』ないし『集団意識』を定式化しようになつた。だが、これほどずるくて誤つた虚偽はない。この虚偽はおびただしい仮装をつけて書物のうちにあらわれたが、どこでも読者をして神秘的な混乱におとし入れたのである。」⁽⁶⁾

人間の意識といふものは神経構造の機能に依存している。しかし、神経系をもっているのは個人だけであつて、群集ないし集団は神経系をもたない。だから、「群集精神」、「集合精神」、「集団精神」といふものは、「集団の虚偽」(The Group Fallacy)にほかならないのであつて、社会心理学は個人の社会行動を研究すべきものだとオルポートは主張した。「われわれが、群集精神、集合精神の理論の浅薄さをさげることができるのは、個人の科学としての社会心理学によつてのみなのである。」⁽⁷⁾

そしてここから、行動主義社会心理学の第二の論法がでてくる。すなわち、従来の群集心理学、本能主義心理学とは反対に、行動主義的観点と実験的方法を重視し、個人の社会行動を厳密な「刺戟―反応」によつて説明することである。いまや人々は、まづなによりも個人の内部に眼をむけなければならぬ。そうすれば人々は、社会行動の根本的メカニズムを個人の内部に発見することができらる。オルポートによれば、社会的行動は、個人と

かれの環境の社会的部分の間、つまり個人とその仲間の間におこなわれる「刺戟—反応」を包括する。このような行動の例は、われわれが、仲間の言葉、身振り、その他の運動に対して「反応」するばあいがある。こうして、「社会心理学は、個人の心理学と対比されてはならない。それは、個人の心理学の一部分」だといっているのである。

たしかに、ル・ボンやタルドが主張した「集団精神」がまったく観念論的虚構にすぎず、人間の心理が個人の心理であることを強調することは、大變結構なことである。また、人間の心理を神経系の活動にもとづいて理解しようということも非常に正しいと、わたくしはかんがえる。しかし、ここで見逃してならないのは、以上のような行動主義社会心理学の主張が、実はそれ自身のうちに、二つの難点をはらんでいることである。

第一に、行動主義はいわゆる「群集精神」、「集合精神」の存在を否定し、正当にも心理とは個人の心理であることを承認しながら、実際は同時に、社会現象一般を心理現象ないし個人心理に解消しようとするところがある。それは、人間の心理と社会現象がはっきり質的に次元の異なる存在であること、レーニンとパヴロフがいったように前者を研究するものは主として（全面的にはない）自然科学にぞくする心理学であり、後者を研究するものは史的唯物論ないし社会科学であることを無視し、機械論的に後者を前者にすりかえてしまう。その結果、社会の客観的・物質的法則の存在が

否定され、社会とは本質上、個人心理ないし個人の行動の単なる「合計」にすぎないことになる。オルポートはいつている。「個人の生得反応、習慣的・情緒的な諸傾向のような心理学的データは、説明原理であつて、社会学はこれにもとづいて集団の生活を解釈する。……一般的には心理学、特殊的には社会心理学は、こうして社会学の基礎科学なのである。」⁽¹⁰⁾みられるように、行動主義社会心理学は、ル・ボンらの「集団の虚偽」を否定しつつ、これと一緒に社会現象とこれを研究する社会学の存在理由を否定する。それは、個人の社会行動を研究するといいつながら、本当は社会現象を心理現象でおきかえ、社会科学を心理学にすりかえるのである。

第二に、行動主義は、まったく正当にも「集団の虚偽」を否定しながら、しかも同時に人間の個人心理と社会的意識ないしイデオロギーを機械的に混同し、また人間の意識の存在と、社会におけるその積極的意義を否定する。社会的意識ないしイデオロギーは個人心理と一緒にされて、機械論的な「刺戟—反応」にひきまげられる。「ある人が刺戟をあたえ、他の人が反応する。この過程のうちに社会心理学の本質がある。しかし、ある人が他の人に刺戟をあたえる手段は、いつも外的な記号^{サイン}か行動である。それは、けっして意識ではない。」また、「意識はいかなる影響もおよぼさず、それゆえ、人間の相互間の反応をなんら説明しない」といっているのである。

行動主義社会心理学は、社会における人間の意識の能動的役割

を否定し、人間を動物から区別するものは労働であり、この労働とともに「思想の直接的現実」である言語（マルクス）と意識が発生したことを無視してしまふ。言語をうみだしたものはたんなる「身振り」にすぎず、また思考とはたんなる「シンボル反応」にすぎない。思考が思考であるゆえんは、それが客観的實在の反映であるからではなく、たんなる「シンボル反応」であり、また外的な身体運動にとってかわつたものだからであり、それがうまれたのは身体運動の「経済」のため（¹²）またもや「思考経済の原理」の新版である！）だといふのである。¹² みられるとおり、行動主義社会心理学は、個人における心理・思考と社会における思想ないしイデオロギーを混同するだけでなく、両者の積極的意義をももに否定してしまふ。それは、条件反射理論、とくに第二信号系の意義を無視し、人間を動物の水準にまでひきさげる。それは、一方では、高次神経活動にかんするパヴロフ学説を歪曲し、「心理現象の物質的基体——¹³神経過程」の研究を卑俗化して、科学的心理学の成立をさまたげたが、他方では、その「生理学主義」・「生物學主義」を社会現象にもちこみ、社会の客観的法則、歴史的発展の法則、社会的意識ないしイデオロギーの現象を、生理現象ないし心理現象でおきかえる。それは、一方では心理現象の不可知論となるが、他方では社会現象の不可知論にたるのである。

すでにみたように、オルポートに代表される行動主義社会心理学は、第一の論法として、ル・ボンやマクドゥガルに代表される

集団心理学ならびに本能主義的社会心理学を批判し、第二の論法では、個人心理学を説いて、個人の社会行動を「刺戟—反応」によって機械論的に説明すべきだと主張した。だがその機械論のゆえに、それは社会現象を心理現象にひきさげ、また逆に、心理現象を社会現象に「たかめ」ざるをえない。心理学が社会科学にたいする「基礎科学」だということになる。そしてここから、行動主義社会心理学の第三の論法がでてくる。すなわち、すでにワトソン・オルポートらが「克服」したはずのかのル・ボン流の「集団心理学」、マクドゥガル・フロイト流の本能主義を、今度は新しい装いをつけて復活することである。また、社会現象・政治現象を「衝動」・「本能」によって説明し、大衆運動を「群集心理」によって説明することである。すなわち、オルポートはあらゆる帝国主義イデオロギーに共通の「三段階論法」を行動主義社会心理学においても完成しようとするところをみる。（このような「三段階論法」はミード、ベヒチュレフにも共通している。）

「筆者の意見によれば、人間の知的・文化的成果は、性衝動の昇華ないし変形だとかんがえるよりも、むしろ性のために、また性生活のより満足な適応の手段としてなされたものだった方が真理にちかい。……そして性は、うまれつきの能力、才能をいつも最大限にはたらかせる拍車である。性衝動を家庭生活という安定化する影響のもとではたらかすことは、進歩の

一要因であつて、人間社会においてこれに匹敵するものは存在しない。⁽¹⁴⁾」

かつてフロイト主義は、人間の知的・文化的成果を性衝動の「昇華」によつて説明したが、行動主義のやろうとすることは、このフロイトの命題をもつと露骨にし赤裸々にして、性衝動を文化の「進歩」の最大かつ直接の推進力だと主張することである。人間社会の進歩ならびに人間の知的・文化的成果の原動力が性衝動であるとすれば、「群集現象」を支配している力も性衝動であり、また飢餓衝動だということになる。オルポートは主張する。ダイナミックに言えば、群集は大規模な暗示現象であり、そこでは、性・飢餓という根本衝動が最高の支配力になっている。そして、これらの衝動の反応は、社会化の方向よりもむしろ「野獸的な暴力」の方向にかえられる性質をもっている。⁽¹⁵⁾人間というものは、個人としても衝動につかれているが、群集を形成すると一層、自己をうしなつてしまふ。というのは、数が多くなればなるほど、個人間の「刺戟—反応」の数は幾何級数的に老大人になり、群集のうち「刺戟—反応」の「循環効果」(Circular Effect)が形成されるからである。⁽¹⁶⁾群集の精神状態は、催眠状態におちいった人の行動・意識と同じものであり、あらゆる抑制的態度、批判的態度は制止される。群集というものは服従しやすく、いつも保守的であり、多数者や既成の原理に絶対的に服従するというのである。

一点のうたがひもなく、ワトスン・オルポートらは、かれらの「批判」したはずのル・ボンやフロイトの「集団心理学」を、行動主義という「新しい」ヴェールをきせて復活している。たとえ、オルポートがル・ボンを「批判」したとしても、それは、ル・ボンが「個人を支配している根本的衝動の意義を過少評価している」からであるにすぎない。⁽¹⁷⁾ル・ボンについていえば、かれは「群集心理」の非合理性を主張したが、個人心理には幾分か合理的なものをみとめていた。ところがオルポートは、そもそも個人自身が非合理的な衝動のかたまりだといっているのである。だから、かれによれば、食糧暴動も、黒人にたする私刑暴動も、さらには政治的急進主義やストライキさえも、個人に内在する「衝動」のあらわれにすぎない。⁽¹⁸⁾いまや悪いのは、資本主義的搾取でもなければ、反動的政治権力でもなく、個人に内在する「衝動」であり、「群集」となつて「猛威」をふるう個人間の「刺戟—反応」にほかならない。ストライキをおこす労働者は、実はエゴイステイックな「衝動」に駆られているのだ。⁽¹⁹⁾エゴイズムをすてよ！ そろすれば、ストライキはおこらないであらう。この社会心理学者は、労働者にむかつてこのように説教するのである。

(二) 「実践」

われわれは以上において、行動主義社会心理学の理論構造を分析して、その「三段階論法」をあきらかにしたが、つぎに、行動

主義社会心理学の「実践」をみることにしよう。

すでにみたように、行動主義社会心理学は、一切の人間の社会行動を「集団の虚偽」から解放し、個人心理ないし個人間の機械論的・原子論的「刺戟―反応」の關係に帰着させた。そしてこの「刺戟―反応」が一切の社会的・政治的・経済的諸現象、大衆運動の「基礎」をなすというのである。この考えはなにをみちびくか。

行動主義社会心理学の第一の「実践」は、社会における階級闘争の必然性を否定し、労働者階級の団結を「集団の虚偽」だとし、これを個人心理に解消することである。オルポートはかんがえる。労働者というものは、平等、正義、民主主義等々、普遍性をもったスローガンをかかっているが、このような普遍性は「幻想」にすぎない。実際は、かれらはエゴイスティックな衝動に駆られているのであって、高尚なスローガンをかかけていても、このスローガンは、労働者の「かくされた動機」や「劣等感」の**かくれみの**にすぎない。ちようど、防禦反応にしがみつく神経症患者が性的な欲望をかくしているように、虚構のスローガンにしがみつく労働者たちは、かれらの真の動機、すなわち「エゴイズム」と「劣等感」をかくしているのだ。だから、現在「どこにでもみられる労働不安を説明するには、労働者を抑圧することからうまれる原因よりも、むしろ心理的原因をもとめなければならぬ。」⁽²⁰⁾そしてオルポートはいつている。

「政治的・哲学的急進主義への傾向のうちには、貧乏、無知についての劣等感の補償されたい態度が反映している。かくして、ここでも環境が悪いのだといって反対の声があげられる。だがこのさい、個人から成功をうばったものは、不公平な政治的・経済的制度だとされる。能力の相違が見逃され、あらゆる人々は長所とそれにふさわしい報酬をうけるのに平等であるべきだとされている。」⁽²¹⁾

オルポートによれば、「急進主義者」は「もたざるもの」であり、「洞察力が低く」、「劣等感の葛藤」に駆られている。「世界産業労働組合」(IWW)の労働者たちは、その劣った地位を自分の個人的無能力よりも資本の不正に帰して満足している。⁽²²⁾この社会心理学者によれば、悪いのは、資本家ではなくて、「劣等感」をいだし、わざと「敵」をつくりあげて、自らを責めさいなんである労働者自身にすぎない。⁽²³⁾もともと、人間というものは、生れつき能力がちがっているのだから、「ある種の階級の区別も不可避的」⁽²⁴⁾なのだ。労働者にこの「事実」をはっきり教えこみ、あきらめさせなければならぬ。労働者よ、劣等感をすてよ！ そうすれば、階級闘争などなくなつて、お前は「平和な生活」をいとなむことができるだろう。お前は、「余暇」を賢明につかつて、家庭生活をたのしむことができるだろう。⁽²⁵⁾ごらんのように、行動主義社会心理学は、十月革命の勃発、ならびに全般的危機のはじまりと世

界的規模における労働運動の昂揚、合衆国では「世界産業労働組合」(IWW)の闘争の昂揚にたいする反革命として生まれたものであり、けっして「心理学」ではなく、反対にもっとも反科学的な、観念論的なイデオロギーなのである。

労働者階級の闘争を「個人心理」に解消することによって「かたづけられた」行動主義社会心理学は、第二の「実践」として、その同じ論法によって、合衆国の黒人問題を「かたづけられる」。たしかにワトソンについていえば、かれは、人種間の優等・劣等を否定し、黒人の「劣等性」を否定したようにみえる。⁽²⁶⁾かくして、若干の「マルクス主義者」は、行動主義のうち、反人種主義を見いだし、その「進歩性」と「国際主義」に感銘したようである。⁽²⁷⁾しかし、行動主義の立場が「生理学主義」であり、また「社会学主義」であるかぎり、結局、黒人問題の本質を陰蔽せざるをえない。オルポートによれば、白人の知性は黒人、黄色人、銅色人の知性より「すぐれて」いるそうである。そして黒人が「劣っている」理由は、「生理学的」にいわば黒人が感情的で制止できず、血圧が高いから(！)であり、「社会学的」にみれば、黒人が社会的に教育されなかったからであり、かれの衝動が「社会的統制の機関」によって条件づけられ、変容されなかったからだ、というのである。⁽²⁸⁾

こうして、合衆国で黒人問題が存在するのは、——この論文を書いている現在、合衆国では、アラバマ大学における黒人女子学生

の退学処分、黒人にたいする差別待遇からおこったバス・ボイコット事件を機にして、末曽有の規模で黒人の大衆闘争がおこっている。そして白人の黒人にたいする差別待遇と抑圧は、アメリカ独占資本の日本国民ならびにアジア諸民族にたいする人種主義的抑圧とすこしも無縁でないのである——、白人独占資本家やキュー・クラックス・クラン(Ku Klux Klan)などによる黒人にたいする兇暴な資本主義的搾取、テロリズム、排外主義的抑圧によるものではなく、一切の原因が、黒人の「生理」と「教育」の問題にすりかえられてしまう。そして、黒人問題の真の解決の道は、黒人人民に対する差別待遇の廃止、黒人労働者と白人労働者を中心とする広汎なアメリカ人民の団結と民主主義のための闘争ではなくて、かえって、「若い黒人の子供にもたらされる精神的影響を組織的に監察する」こととなる。⁽²⁹⁾しかし一体、だれが黒人を「組織的に監察する」のか。いうまでもなく、知性の「すぐれた」白人で「監察する」のか。いうまでもなく、知性の「すぐれた」白人であり、なかならず行動主義社会心理学者という名の「選良」⁽³⁰⁾だということになる。みられるように、オルポートは、黒人問題を解決すると自称しながら、実際は、黒人に対する「組織的監察」をもっと強化すること、黒人にたいし白人に都合のいい「条件反射」(?)をかけること、すなわち、黒人にたいする民族的抑圧を永遠化しようと提案しているのである。⁽³⁰⁾

行動主義社会心理学の第三の「実践」は、一切の国際的・経済的・政治的諸現象を個人心理ないし個人の衝動の問題に解消し、

ここから、コスモポリタニズムと「組織された資本主義」の理論をみちびきだすことである。オルポートはかんがえる。経済現象は、一つの心理的現象であつて、市場や不景気も、人間の個人の心理や「うわさ」に左右されるものである。⁽³¹⁾そして同様に、戦争も個人心理の問題にすぎない。戦争とは、ある国民にぞくする諸個人の支配的な衝動を、他の国民の行政権力が妨害することからおこる闘争である。⁽³²⁾だから、戦争をなくするためには、ある国民にぞくする諸個人の衝動を、他の国民が妨げないようにすればよろしい。こういって、この社会心理学者は、戦争の危険があるのは帝国主義の法則がはたらいっているからであること、戦争を確実になくするためには、結局は帝国主義をなくしてしまわなければならぬことをかくす。むしろ、戦争を廃止することのできる唯一の力は、「協定された統制」であり、あらゆる国家政府をして他国民の権利を侵害しないように強制する権利をもつ超政府 (Super-Government)⁽³³⁾だといふのである。

国際的にはコスモポリタニズムの成立を説教して帝国主義に御奉公したオルポート・ミードの社会心理学は、つぎに、国内的には「組織された資本主義」の確立をとく。さきに見たように、行動主義社会心理学は、労働者にむかつては階級闘争などやめて、余暇を賢明につかつて家庭生活をたのしみなさいと「忠告」したが、他方、資本家にむかつては、労働者の抑圧された衝動にたいして有益で快適なはけ口をみつめてやりなさいと「忠告」する。

「所有主、取締役、経営者は、労働者の心のなかにある劣等感の葛藤を解消してやる義務をまぬかれることはできない。……この〔労働者の〕階層感情を挑発しないことは、資本家、経営者が産業の平和のためになしうる最大のサービスの一つであろう。」そしてこのために、大企業 (Big Business) は、一方では利潤を追及しつつ、他方ではそのもうけの一部分を労働者のために統制し、「社会的調整」という目的をはたさなければならぬ。もちろん、これは「産業の社会主義的統制ではなく、個人的統制の社会化」にすぎないといふのである。⁽³⁴⁾では、一体だれがこの産業の「個人的統制の社会化」を実現するのか。いうまでもなく、労働者階級ではなくて、独占資本家という名の「リーダー」である。オルポートはいつている。「権勢、知性、社会的寄与の相違や、統制しようとする衝動は、おそらくいつもリーダーシップをうみだすであろう。あるものは指導する運命をはたし、他のものは追隨する運命をはたす。」⁽³⁵⁾いまや、一切を支配するものは、「指導する運命」をもった「リーダー」だけであり、「選良」^{エリート}だけである。そしてこの「選良」による指導のもと、「経済的統制」を実現し、国家、宗教、教会、学校を「より適切な調整のサービス」のため動員しなければならぬといふのである。

わたくしは、拙稿『社会心理学の批判』において、フロイト主義社会心理学のゆきつくところが「選良」の理論であり、さらに今日、合衆国でいろいろの種類の「選良」の理論が流行している

ことをあきらかにしたが、行動主義社会心理学のゆきつくところも、「組織された資本主義」の理論であり、「選良」の理論であり、ついにはマツカーシズムの激励である。行動主義社会心理学者G・H・ミードの理論が、アメリカ・ファシズムの思想的源泉の一つとなったのは偶然でなく、また行動主義をマス・コミュニケーション理論に應用したW・リップマン⁽³⁸⁾、政治学に應用するH・D・ラスウェル⁽³⁹⁾が、ともに今日の合衆国でもっとも指導的な反動イデオログとなり、はっきりアメリカ型ファシズムの弁護論者となつたのはまったく理由のないことではない。そして現在、行動主義社会心理学は、新行動主義の色彩をおびつつ、アメリカの社会心理学、マス・コミュニケーション理論、人類学、近代政治学、社会学、意味論、サイバネティックス等に広汎な影響をおよぼし、現実の神秘化と偽造のために最大限に動員されて⁽⁴⁰⁾いるのである。

註(1) J. F. Brown, *Psychology and the Social Order*, N. Y., 1936, p. 220.

(2) R. Dewey and W. J. Humber, *The Development of Human Behavior*, N. Y., 1951, p. 15.

(3) ここでは、主要な著書をあげただけであつて、それ以前に行動主義的社会心理学の論文がなかつたという意味ではない。たとえば、G・H・ミードは『生理学的心理学にたいする対立者としての社会心理学』(一九〇九年)、ヘヒチェレフは『客観的科學としての社会心理学の对象と課題』(一九二一年)を発表し、行動主義心理学への方向を提唱していた。

(4) S. Freud, "Massenpsychologie und Ich-analyse," *Gesammelte Schriften*, Bd. VI, Wien, 1929, SS. 264—275. 以下。

(5) W. McDougall, *Introduction to Social Psychology*, London, 1945 p. 38.

(6) F. H. Allport, *Social Psychology*, Camb., 1924, p. 4. ヘヒチェレフの『集団反射学』も「集団精神」の批判から出發する。Vgl. W. Bechterew, *Die kollektive Reflexologie*, Halle, 1928, SS. 5, 12.

(7) Allport, *op. cit.*, p. 8.

(8) *Ibid.*, p. 4.

(9) В.И. Ленин, *Сочинения*, т. 14, стр. 216.; Павлов, *op. cit.*, pp. 229, 462, 610. 心理的諸現象を研究する心理学が主として自然科学にぞくするという主張は、大いに議論の余地あるところであろう。もちろん、心理的諸現象の研究が社会科学ないし史的唯物論の研究からはなれては絶対に発展できないし、また人間の意識の内容が階級的であることはどんなに強調しても強調しすぎることはないが、それにもかかわらず、バヴロフの条件反射の理論に依拠するかぎり、心理学は主として自然科学にぞくするとわたくしはかんがえる。この問題はソ同盟でも現在討論中の問題であつて、たとえばエス・エリ・ルビンштейンは心理学は「人間の科學」であるとし、またカ・エヌ・コルニコフは心理学は「社会科学」にぞくすると主張してゐる。(くわくは) С.Л. Рубинштейн, «Вопросы психологической теории», *Вопросы Психологии*, № 1, 1955, стр. 9.; К.Н. Корнилов, «О задачах советской психологии», *Воп. Псих.*, № 4, 1955, стр. 25-26.) 私見によれば、コルニコフの見解はまことにまことにあり、ルビンштейンには賛成すべき点があるが、現在のところ、『心理学の哲學的諸問題について(討論の綜括によせて)』(『哲學

『諸問題』五四年四号) (《О философских вопросах психоло-
гии, Вопросы философии, № 4, 1954.》) の結論が正しい
とかがえる。しかしこれは、今後さらに研究さるべき問題
である。

(10) Allport, *op. cit.*, pp. 10—11.

(11) *Ibid.*, pp. 11—12. このように、人間の意識、思考、思
想をたんなる「刺戟—反応」に解消し、社会関係を記号関係や
「コミュニケーション」にすりかえる見解は、とくに「社会
行動主義者」G・H・ミードによつて精力的に展開された。
かれは、「わたくしが示そうとするアプローチの立場は、
経験を、社会の観念、すくなくとも社会秩序に本質的なコミュ
ニケーションの観点からとりあつかうことである。」(Mead,
Mind, Self and Society, p. 1.) として、社会過程をうごか
している基本的メカニズムは「身振りのメカニズムであつて」
(p. 13) 言語も「身振り」なすし「記号」にすぎず、言語
の意味など問題にならない。なるほどミードは「社会」につ
いて語っているが、この「社会」たるや、その土台をなすも
のは生産関係ではなく、「コミュニケーションの原理」であ
るにすぎない。すなわち、社会の本質とは、「他人が自我のう
ちにあらわれること、他人と自我の同一化、他人によつて自
己意識に達すること」(p. 253) だといふのである。こうして
ミードは、「経済」も、またイデオロギーである「宗教」も
一緒にたにし、これを観念論的な「コミュニケーションの原
理」いいかえれば西田哲学的な「他人と自我の同一化」(?)
なるものによつて神祕化してしまふ。ミードの「社会行動主
義」は社会的であり実践的であるようにみえるが、実はもつ
とも極端な独在論であり、もつとも非実践的な「行の哲学」
である。「全世界は生物体そのものの内部でおこつてい
ることによつて陳述されることが出来る」(p. 38.) とかれは独
論を主張しているのである。(ミードの「社会心理学」の政

治的本質についてはのちをみよ。) 尚、ミードはデューイに匹
敵するプラグマティズムの代表者であること、かれの著書は
大部分、指導的な論理実証主義者チャールズ・W・モリスの
編集・序文つきで出版されたことに注意していただきたい。
ミードの社会心理学は「意味論哲学」の先駆者となり、また
いま流行の「マス・コミュニケーション」理論の哲学的背景
になつた。コミュニケーション理論のイデオロギー的性格につ
いては、つぎの批判をみよ。 Cf. M. Crozier, «Human en-
gineering», *Les Temps Modernes*, № 69, Juillet, 1951,
pp. 65—66.

(12) Allport, *op. cit.*, p. 104.

(13) В. И. Ленин, *Сочинения*, т. 1, стр. 127.

(14) Allport, *op. cit.*, pp. 75—76.

(15) *Ibid.*, p. 293. Cf. Watson, *Behaviorism*, pp. 37—38.;
Becherew, *op. cit.*, SS. 60ff.

(16) Allport, *op. cit.*, p. 301. このような見解は行動主義
だけでなく、フロイト主義、ゲシュタルト心理学など、ほとん
どあらゆる傾向の「社会心理学」の共通の主張になつてい
る。それは、科学ではなく、今日、新聞その他をつうじて広汎に
宣伝されている大衆蔑視のイデオロギーである。一例をあげ
よう『読売新聞』(五六年一月三日)は、「新潟弥彦神社の惨
劇」と題する「社説」でつぎのようにいつている。「動物でも
一匹でいる場合にはつねに冷静だが群を成している場合には
ちよつとしたことでパニック状態になるといふ。人間もこう
した動物の心理と同様であり、数万といふ群れの中にはい
ると、個人的な英知を失ひ、ささいなことでパニック的な行動
に出る。戦争や暴動は、いつもこのような心理で決行され、
このようなパニックが利用され集団になつた人間は取返し
つかないことまで平然とやる。集団人の無思慮・非常識も反省
さるべきであろうが、ここにはどうにもならない力が作用し、

これに向つて叫ぼうと、教えようとムダな場合が多い。」こうして、「集団の性格をもつと心理的に研究し分析し、群を成す人間の取扱ひについてさらに科学的な教養を持たなくてはならない」というのである。このような見解がどんなに反動をかを説明する必要があるか。実際われわれは「社会心理学」を研究してもけつして「科学的な教養」をもつたことにはならないだろう。このような大衆蔑視のエセ科学をばくろすること、これがわれわれのイデオロギー斗争の課題なのである。

- (17) *Ibid.*, p. 295.
 (18) *Ibid.*, p. 294.
 (19) *Ibid.*, p. 310. ヴヒナエレンもそううつてゐる。 Vgl. Bechterew, *op. cit.*, p. 63.
 (20) Allport, *op. cit.*, p. 411.
 (21) *Ibid.*, p. 372.
 (22) *Ibid.*, p. 411. 「世界産業労働組合」(IWW)とは、合衆国労働者階級の戦闘的な産業別組合であつて、一九〇五年、シカゴで創立された。この組織は、けつして大きくはなく、また左翼二重組合主義にもとづいていたが、第一次世界戦争中は断乎として反戦的態度を堅持し、また十月革命後は積極的に親ソ的態度を表明した。行動主義の「社会心理学」の成立が、このような戦斗的労働組合にたいする「批判」を直接の動機としていたことは注目に値する。
 (23) このような主張は、オルポートの独占物でなく、現代のありとあらゆるブルジョア哲学者・心理学者のいふ古した主張の一つである。このような論者として、F. ニーチェン、M. シェーラー、S. フロイト、A. アドラー、H. デ・マン、M. イーストマン、A. J. トインビー、W. ラテナウ、モネローなどがゐる。 Cf. S. de Beauvoire, «La pensée de droite, aujourd'hui», *Les Temps Modernes*, Nos 112—113, 1955, pp. 1550—1552.; P. Naville, *op. cit.*, pp. 43, 160f.
 (24) Allport, *op. cit.*, p. 385.

- (25) *Ibid.*, p. 414.
 (26) Watson, *op. cit.*, p. 83.
 (27) Naville, *op. cit.*, p. 125.
 (28) Allport, *op. cit.*, pp. 386—387.
 (29) *Ibid.*, p. 387.
 (30) 一般に、オルポートのこの本は、学界では「時代おくれ」になつたという主張もないではないが、それにもかかわらず、その黒人問題にかんするテーゼは、最近でもアメリカの白人排外主義者によつて利用されている。たとえばN・C・メイアーその他の「社会心理学者」は、「黒人が白人婦人を暴行した」という想定のもとに人為的に白人暴徒による「私刑行動」をおこさせ、この「社会心理学的実験」によつて、オルポートのテーゼを「証明」しようといふことを見た。(Cf. N. C. Meier and et al., "An Experimental Approach to the Study of Mob Behavior," in Ph. L. Harriman, ed., *Twentieth Century Psychology*, N. Y., 1946, pp. 153—174.) だが、このような「社会心理学的実験」自体が、もつとも露骨な人種主義イデオロギーなのである。実際、アメリカの「社会心理学者」のうちで、黒人問題を「心理主義的」に「説明」して偽造と神秘化をやらなかつたものはほとんどない。「社会心理学」とくにフロイト主義・新フロイト主義の黒人問題にたいする反科学的・反動的なアプローチについては、さきをみよう。З. А. Баранов, «О «психологической» разнородности американского расизма», Вопросы Философии, No. 2, 1955, стр. 153—167.; И. А. Теевский, Расистская полтика американского империализма, 1954, стр. 22—23, 39.
 (31) Allport, *op. cit.*, pp. 407—408. これは、多くの社会心理学者にほとんど共通した見解である。ヴヒナエレンによれば、経済生活の規制者は「集団反射」であつて、この「集団反射」が必要・供給・流行・趣味となつて市場を規制する

- そうであり、またデューイによれば、社会の中心をなすのは「生産」でなく「消費」であり、生産を重視した点がマルクス主義経済学の「誤謬」だそうである。みられるように、社会心理学は、ケインズ主義に一致する。 Cf. Bechterew, *op. cit.*, S. 14.; Dewey, *Human Nature and Conduct*, Modern Library Edition, p. 273.
- (32) Allport, *op. cit.*, p. 401.
- (33) *Ibid.* ミードの社会心理学もコスモポリタニズムの説教に つとめ、また最近では「新行動主義」のトールマンは、フロイト主義の「同一化」の概念を利用しつつ、オルポルト・ミードよりももっと極端なコスモポリタニズムを主張している。(Cf. Mead, *op. cit.*, pp. xxxv, 209, 287.; E. C. Tolman, "Identification and the Post-War World," in *Twentieth Century Psychology*, pp. 119—127.)
- (34) Allport, *op. cit.*, pp. 413—414.
- (35) *Ibid.*, p. 422.
- (36) *Ibid.*, p. 429.
- (37) まえにもみたように、ミードの「社会心理学」は、社会的な見解はなにをみちびくか。第一に、社会の経済的・階級的構造をかくし、第二に、民主主義の実現を「コミュニケーション」の実現にすりかえてしまふ。かれはいう。「民主主義の真の意味は、あらゆる人が協同の過程に精神的に参加することによつて、自己を実現することである。」(Mead, p. xxxiv.) もちろん、かれは「水平的傾向」には絶対に反対し、これは個人々人を「平凡化」するといふ。むしろ、人々は生れつき「機能」がちがつている(たとえば資本家と労働者というように)のだから、この「機能的相違」をなくするのでなく、この「機能的相違」をみとめ、コミュニケーションをさかんにして、十分に「実現」できるようにしてやらなければなら

ない。「民主的意識は機能の相違によつてうまれる。」(p. 319, note.) また「機能的相違と社会的参与を十分に達成すること」は、人間共同体のまえによこたわつてゐる「一種の理想である」(p. 326.) といふのである。わかりやすくいえば、資本家も警察官も労働者もつまり搾取者も被搾取者も各々その地位に甘んじ、その分をつくしなさい、そうすれば「民主的共同体」ができあがるでしょうといふのである。「いわゆる人間社会の理想は、一方では経済的、社会的、資本主義社会とよめ」によつて、他方では普遍的宗教によつてある意味で近づくことができる。だがそれはけつして十分に実現されない。」(p. 328.) ここでミードがフッサイズムを説教しているのがわからない人がいるだろうか。ミードのこの本が、一九四一年、「全体主義大系」の一冊として白揚社から邦訳されたのは偶然でない。

- (38) リップマンの『世論』(初版、一九二二年)はマス・コミュニケーション理論の古典であるが、その立場は、プラグマティズム、行動主義、フロイト主義の折衷物にすぎない。かれはこの本で、人間の認識過程をたんなる行動主義的な「刺戟—反応」にひきさげて、「ステロタイプ」なる概念をつくりだした。そして、この「刺戟—反応」、「シンボル」、「ステロタイプ」を操作すれば「群集」を操縦できるといふ「選良」の理論をつくりあげた。(Cf. W. Lippmann, *Public Opinion*, N. Y., 1950, pp. 73, 75, 99, 188—189, 204—6, 243.; H. Apherker, "Walter Lippmann and Democracy," *Political Affairs*, August, 1955, p. 51.) 尚、かれはすでにこの本で J・バーナム流の「経営者革命」の思想の先鞭をつけていたが、最近、公然とフッサイズムのイデオログの本領をあきらかにした。(Cf. Lippmann, *op. cit.*, p. 146.; *The Public Philosophy*, N. Y., 1955.)
- (39) H・D・ラスウェル『行動科学における決定過程の研究』

『思想』一九五五年一〇月号。Cf. R. Barkley, "The Theory of the Elite and the Mythology of Power," *Science & Society*, Spring, 1955, p. 99.

(40) このような傾向に協力している行動主義・新行動主義の心理学者ないし社会心理学者には、C・L・ハル、E・C・トールマン、N・E・ミラー、J・ダラード、R・デューイ、W・J・ハンバー、J・ウイッティンク、I・L・チャイルド、O・H・モラーなどがあり、人類学者では、G・P・マードック、C・クラックホーン、マス・コミュニケーション理論家では、L・W・ドーブがいる。またその変種としてS・チャコーチンがいる。これについては後にふれる。
Cf. W. W. Lambert, "Stimulus-Response Contiguity and Reinforcement Theory in Social Psychology," in G. Lindzey ed., *Handbook of Social Psychology*, Vol. I, Camb., 1954, pp. 58, 69—70, 73, 81, 85—87.

三、行動主義とパヴロフの条件反射の理論

行動主義は唯物論的心理学にとって学ぶべきものをもっているか。行動主義はパヴロフの条件反射の理論と同じものであるか。すでにみたように、行動主義は、旧来の観念論的心理学に反対し、心理学に「革命」をおこしたかのようにみえた。それは、意識・知覚・感情等の「古い」心理学的概念を排除し、行動という「新しい」概念をおきかえた。たしかに、意識や知覚という概念よりもはるかに具体的・唯物論的にみえる「行動」を中心におく

ことによって、またこの「行動」を「刺戟—反応」という決定論的因果関係に分解し、厳密に客観的な観察と生理学的実験方法で研究すると提唱することによって、行動主義は、旧来の心理学よりも、はるかに科学的・唯物論的になったようにみえる。すくなくからぬ「マルクス主義者」はこの点に幻惑されて、行動主義を唯物論的心理学だと名づけ、これをマルクス主義心理学の土台とすべきだと説いた⁽¹⁾。また周知のように、ワトスン自身がパヴロフの条件反射の理論を自分の学説の正当性を説くために利用し、他方、パヴロフ自身もしばしば行動主義について好意的な発言をしたこともみとめなければならぬ⁽²⁾。そしてこのため、ワトスンやソーンダイクとパヴロフはほとんど同一視され、行動主義と条件反射の理論は同じものだというが、学界の「常識」になっ⁽³⁾ている。

このような「常識」は正しいか。結論からいえば、わたくしはまったく正しくないとかんがえる。行動主義とパヴロフの条件反射理論を同一視することは、一方では、行動主義ならびにその哲学的背景であるプラグマティズムの機械論的ならびに観念論的本質をかくし、誤認させるだけでなく、他方では、パヴロフ理論の弁証法的・唯物論的性格を卑俗化し、ひいてはマルクス主義そのものを俗流化してしまふ。われわれは、以下、行動主義と高次神経活動にかんするパヴロフ学説の対立点をあきらかにして、真の科学的・唯物論的心理学の方角をしめすことにしよう。

(一) 唯物論と生理学的観念論

パヴロフの条件反射の理論と行動主義の第一の対立点は、前者が人間の心理現象を研究するにあたり、一貫して唯物論の立場をつらぬいたのたいし、後者は、機械論的な俗流唯物論の立場にたち、そしてまさにここから、必然的に主観的観念論にゆきつかざるをえなかつた点である。

わたくしは、パヴロフが唯物論的立場にたっていたとのべたが、このことは、まず第一に、パヴロフが客観的な生理学的方法をもつとも複雑な心理現象の研究にまでつらぬいたことを意味する。パヴロフは、旧来の心理学が、ほとんど例外なく、人間の心理現象を客観的・生理学的方法によって、また実験によって研究する道をとらず、これに哲学的ないし主観的解釈を勝手にもちこんでいたことをはげしく批判した。かれはのべている。

「わたくしは、われわれの主観的世界を構成するすべてのものを包含すると称するあらゆる理論に断乎として反対する。だが、わたくしは、主観的世界を分析し、個々の点についてたんに理解しようとするところをけつして拒むものではない。この解釈は、われわれの主観的生活のいろいろの現象を、現代自然科学の実証的データと合致するように解釈することではなければならない。この目的のために、これらのデータをわれわれ

の精神生活のあらゆる特殊現象にできるだけ正確にあてはめるようにいつも努力しなければならぬ。わたくしがいつも主張してきたように、われわれがこれまで心理活動といってきたものの大部分の生理学的理解は確固たる土台にたっている。そして、人間をふくめて高等動物の行動を分析するばあひも、純粹な生理学的概念、証明ずみの生理学的過程から出発することが正しいのである。」⁽⁴⁾

もちろん、「客観的・生理学的方法」を重視したものに、ワトスンとかれに代表される行動主義者がいる。しかし行動主義者についていえば、かれらの「生理学的方法」はけつして科学的ではなかつた。かれらは、人間の心理現象をその「物質的基体——神経過程」によってでなく、反対に、さきにものべたように筋・腺・内臓の運動によって「説明」し、かくして事実上、心理現象を説明しないで排除した。ところがパヴロフは、一貫して「神経主義」の立場をとり、高次神経活動を人間の心理現象を理解する基礎だとかんがえたのである。行動主義者が、機械的・俗流的唯物論の立場で神経過程を筋・腺・内臓と同一視し、混同したのたいし、パヴロフは唯物論の立場から「心理現象の物質的基体——神経過程」という質的特殊性に依拠したのである。たとえば行動主義者 E・R・ガスリーは、高次神経活動、とくに大脳両半球の特質と法則を無視し、条件反射を形成する刺戟として筋肉からくる筋運

動感覺刺戟を無数に仮定し、この筋肉刺戟の無数の組合せによって動物の行動を説明しようとしたが、この俗流的な「生理学的方法」はパヴロフからはげしい批判をうけた。⁽⁵⁾ 実際、このように無数の筋運動感覺刺戟が大脳両半球にやっているとすると、この刺戟の量の老大きさだけによっても、それは皮質と外界との関係におそるべき妨げとなり、心理現象の成立そのものを不可能にしてしまふからである。こうして、行動主義者は、すぐれて生理学的方法を採用したのではない。反対に、「行動主義心理学者は心理学から生理学をひきはなし」⁽⁶⁾、みずから觀念論的心理学への扉をひらいたのである。

かりに、一步をゆずって、行動主義者も科学的な生理学的方法にのっとり、神経活動の研究をおろそかにしなかつたとしても、だが、これだけで行動主義心理学が科学的であり、唯物論的であるといふことができるだろうか。いや、それだけでは十分ではない。わたくしはパヴロフ理論が一貫して唯物論的であるといつたが、このことは、かれが心理現象を高次神経活動によって説明しただけでなく、第二に、この心理現象が客観的・物質的な世界の反映であることをはっきりみとめたことを意味する。パヴロフはいつている。「条件反射によって」一つの結合、すなわち一つの連合が形成される時、これはうたがひもなく対象についての認識、外的世界の特定のある関係についての認識である」と。⁽⁷⁾ あきらかに、パヴロフの条件反射の理論は、物質が一次的であり、意

識は二次的であること、そして後者は前者の反映であるという唯物論の立場にたっている。

ところが行動主義者が意識ないし心理現象についてかたるばあい、それはけっして客観的な物質的な存在の反映ではなく、たんに生理学的な筋運動にともなう「附帯現象」(epiphenomenon)であるにすぎない。⁽⁸⁾ いいかえれば、客観的存在が人間の生理学的機能、とくに高次神経活動をつうじて意識として反映されるのではなく、逆に生理学的機能、すなわち筋運動ないし神経活動が、意識をさうらに客観的存在を規定することになる。たとえば、光・音などのような対象が、眼、耳などのような感覚器の形成とその活動を条件づけるのではなく、後者が前者を規定しつくりあげるといふのである。これは觀念論ではないか。あきらかに觀念論であり、「生理学的觀念論」ないし「生理学主義」である。⁽⁹⁾ こうして行動主義はそのあらゆる新しい科学的・唯物論的なスローガンにもかかわらず、実は、ヨハネス・ミューラーやヘルムホルツらの古い「生理学的觀念論」を新しい装いをつけて再現したものにはすぎない。また一般に、行動主義心理学の方法は「客観的」であるといわれているが、それはけっして唯物論的ないし科学的であることを意味しない。「客観的」だと自称していても、主観的觀念論にすぎないものが沢山ある。(たとえばフッセルの現象学がそうである。) 事実、ワトソンの行動主義の「客観的方法」は、多くの心理学者もみとめるように、正確には「操作主義」と規定されねばな

らない。行動主義はその後、新行動主義となり、ますます「操作主義」、論理実証主義、現象学に接近しつつ「発展」したが、この方向は、すでにワトソンの行動主義そのものうちにねざしていたのである。⁽¹⁰⁾

さて、パヴロフの高次神経活動にかんする学説は、一貫して生理学的方法をつらぬくとともに、人間の心理現象が外的世界の反映であることの確認から出発した。このことは、条件反射の理論を理解するうえで決定的に重要である。なぜなら、条件反射が形成されるのは、外的環境がきわめて多様であり、たえず変化しているので、恒常的結合としての無条件反射では不十分であり、条件反射、すなわち一時的結合によってこれを補う必要があるからである。もし外的環境の存在とたえざる変化、これが生命体に作用することをみとめなければ、条件反射理論をうけついでと自称するにもかかわらず、行動主義は、けっして条件反射理論を理解したとはいえないのである。

パヴロフの学説は一貫して唯物論的反映論の立場にたち、また生理学的方法をとった。それは「心理現象の物質的基体——神経過程」の研究の必要を説いた。しかしこのことは、人間の心理現象が神経過程と同じものであることを意味するだろうか。また心理現象、主観的現象が存在せず、したがってこれを研究する心理学の存在理由がなく、心理学を生理学に解消していいことを意味するか。いや、絶対に反対である。パヴロフはのべている。

「主観的世界を否定するのは、ばかげたことであろう。もちろん主観的世界はたしかに存在する。そしてわれわれの主観的世界の現象の定式化としての心理学は、まったく合法的なものであり、この点を議論するのはおろかなことであろう。……このことについてはいうまでもない。問題はこの主観的世界の分析にある。もちろん、心理学的分析は高次神経系を研究し、分析しようと千年間にもわたり実りなき努力をしてきたことをかんがえねばならない。だが、現実の反映としての心理学、主観的世界をはっきり一般的な定式であらわす心理学はもちろん必要なものである。わたくしは、心理学のおかげで、所与の主観的状态の複雑さをかんがえることができる。」⁽¹¹⁾

すでにみたように、機能主義者・プラグマティスト・行動主義者・反射学者たちは、人間の心理現象をたんなる筋運動に帰着させ、実質上、人間の心理現象の存在を否定し、心理学を生理学にすりかえて、科学的心理学の成立の可能性を否定した。観念を第一次的だという観念論者たちが、心理現象の科学的研究の意義をまったくから否認した。ところが、人間の主観的世界を承認し、しかもこれを科学的に説明する可能性をひらいたものは誰であろう、観念論者でも、また機械論的な行動主義者でもなくて、皮肉にもかれらが「素朴」だといってはげしく非難するほかならぬ唯

物論者なのである。

(二) 大脳の意義

バヴロフ理論と行動主義の第二の対立点は、後者が大脳両半球の意義をすこしも理解せず、「刺戟—反応」を機械論的・原子論的に理解したのたいし、前者は、大脳両半球の決定的な意義、ならびにその内的法則をあきらかにしたことである。

バヴロフは主張する。条件反射形成の基本的条件は、一般に無関係の刺戟を無条件反射と一回ないし数回、時間的に一致してあたえることである。そして、条件反射はすべての無条件反射を基礎とし、要素的な形からきわめて複雑な複合体にいたるあらゆる種類の内外の環境要因から形成される。だが、「ただ一つ制限がある。それは大脳両半球のうち、その要因をうけとることのできる受容要素が存在しなければならぬことである。脳のこの部分によって広汎な綜合が実現されるのである。」⁽¹²⁾ 普通、「条件反射」という言葉は行動主義者をもふくめて非常に多くの心理学者によって安易につかわれているけれども、かれらは、条件反射がほかならぬ大脳両半球において形成されること、条件反射の形成と大脳両半球の活動がしつかりむすびついており、そしてこの部分が体内のあらゆる現象を指揮していることをほとんど無視している。(もちろん、このことは、条件反射の法則が内臓器官にあって

はまらないことを意味しない。条件反射の範囲を内臓器官をはじめ身体のある器官にひろげたことは、カ・エム・ブイコフ『大脳皮質と内臓器官』の大きな功績である。だが、このことは大脳皮質の決定的な役割をすこしも否定しないのである。)とくに行動主義者たちは、バヴロフがあきらかにした反射の三つの原理をまったく無視している。反射の三つの原理とはなにか。「第一に決定論の原理。すなわちあらゆる活動や効果には衝撃、刺戟、原因があること。第二に分析と綜合の原理。すなわち全体をその構成部分、単位にまず分解でき、またその後この単位、要素から全体を再構成できること。最後に、構造的な原理。すなわち力が空間のうちにその活動を配置すること、運動の構造への適合。」⁽¹³⁾——これである。行動主義者はこの三つの原理を無視するので、いかに「条件反射」について言明しようとも、実際はこれをまったく俗流化してしまふ。たとえばワトソンの弟子ラシュレーは、中枢神経系の構造の意義をみとめることに反対し、人間の脳髄の高次のメカニズムの問題を海綿やヒドラや胎生組織によって解決しようとするところみ、ここから「知性は未分化の神経活動の一機能である」というスピアマン流の生気論的観念論におちいたのである。⁽¹⁴⁾ 一般に行動主義者が単の迷路実験を重視して、この実験の科学性をあやしまさず、これをすぐ人間にあってはめるのも、かれらが反射の三原理を無視していることによるものである。

さて、バヴロフは決定論の原理にもとづき、脳髄の活動を、生活

体と生活条件との外的相互関係をあらわすものとみなした。だがこれに劣らず重要なことは、かれが、外的要因は内的諸条件をとらうして作用するという弁証法的構造を高次神経活動にはつきりみとめたことである。かれは、刺戟が内的諸条件、すなわち大脳皮質の法則、興奮と制止、拡張と集中の法則、相互誘導の法則をとらうして作用することをあきらかにした。パヴロフはかいている。

「大脳皮質の根本過程は興奮と制止であり、その運動は拡張と集中、相互誘導の形をとっている。大脳両半球の特殊な活動は（大部分）外的世界からと生命体の内部からくる刺戟のためざる分析と総合に帰着する。そのうち刺戟は下位の中枢にむかい、皮質下よりはじまって脊髄の前角細胞におよんでゆく。こうして、皮質の作用の下、生命体の全活動は、環境とますます正確に対応し、平衡する。」⁽¹⁵⁾

この大脳皮質の法則をはつきり理解することは、パヴロフ学説と行動主義の相違点を理解するうえで決定的に重要である。というのは、行動主義者がいわゆる「刺戟—反応」についてかたるばあい、かれらは、外的要因は内的諸条件をとらうして作用するという弁証法的構造⁽¹⁶⁾すなわち大脳皮質の法則を無視し、ここから人間の心理現象を、主観的・現象論的に「刺戟—反応」という機械論的図式に還元している。だがこのような「刺戟—反応」という素

朴な直接的な図式では、パヴロフがガスリー批判でしめしたように、延滞反射や逆説相、超逆説相のような複雑な現象を説明できないのである。⁽¹⁷⁾

(三) 第二信号系

パヴロフの条件反射理論のもっとも大きな功績は、かれが動物の高次神経活動と人間のそれとの質的相違をあきらかにし、第二信号系の概念を導入して、言語の意義をあきらかにしたことである。パヴロフは、動物の高次神経活動の研究の主要目的は、人間の心理活動の生理学的法則をあきらかにすることだとかんがえ、心理学を自然科学のうちにくくめるべきだとした。だがこのばあい、かれは犬にみられる高次神経活動を人間に機械的に適用しようとはけっしてしなかった。かれはいつている。

「動物界の進化が人間の段階に達すると、神経活動のメカニズムに特殊なものがくわわった。動物にとっては、現実は、生体の眼、耳、その他の受容器の特殊な細胞に直接やってくる刺戟、そして大脳両半球におけるその痕跡だけによって信号される。これは、一般自然環境としての外的環境およびわれわれの社会環境からの印象、知覚、表象として、われわれがもっているものであり、聞いたり見たりする言葉は例外である。前者は現実の第一信号系であって、人間と動物に共通のものである。

しかし言葉は人間に独特の、現実の第二信号系であつて、第一信号の信号である。言葉による無数の刺戟は、一方では、われわれを現実から遠ざけた。だからわれわれは、現実をたいするわれわれの關係をゆがめないために、たえずこのことを記憶しなければならぬ。他方、言葉こそ、われわれを人間にしたのである。⁽¹⁸⁾

動物と人間の相違点はなにか。それは、人間は労働し、言葉をはなし、思考することである。この三つの活動は、はなれがたく結びついている。人間は思考しないで労働することはできず、言葉をつかわないで思考することはできない。また思考しないで言葉をはなすことはできない。この三つの活動は弁証法的統一をなし、一つの同じ神経活動の原理、第二信号系にもづいてゐる。(労働の意義については、パヴロフはエンゲルスほど明確に理解しなかつたようだが、それでも手の意義をはつきり理解してゐた。⁽¹⁹⁾)そしてこの第二信号系の成立とともに、自然的対象だけでなく、社会的対象、言葉が人間にとって刺戟になる。第一信号系によつて、具体的な自然的対象にたいする生体の反応がおこなわれ、第二信号系によつて、言葉という形式をとつて一般化がおこなわれる。第二信号系は第一信号の信号となり、そのことによつて、人間に抽象と一般化という思考能力をもたらすが、しかも同時に外界に一層正しく完全に反応する可能性を人間にあたえるの

である。もちろん、第一信号系の活動にあてはまる根本法則は、第二信号系を規定する。しかし、第二信号系は制止と誘導の法則によつて、逆に第一信号系と皮質下位に働きかける。⁽²⁰⁾両者はたえず交互作用のもとにある。かくして、いまや人間は第二信号系によつて動物と区別されるだけでなく、人間の第一信号系そのものが社会的に条件づけられ、動物の第一信号系と質的に区別されてくる。⁽²¹⁾このことは重要である。というのは、これによつて、人間の感覚器官・思考器官そのものも歴史的・社会的に条件づけられてゐることがしめされてゐるからである。人間の心理現象は、高次神経活動によつて生理的に条件づけられてゐるだけではない。それはまた社会的にも条件づけられてゐる。(だが、このことは、

心理学が史的唯物論ないし社会科学の一部門であることを意味しない。心理現象は社会的・歴史的に条件づけられており、またその研究は社会科学的研究からはなれてはけつして発展できないが、それにもかかわらず、心理学は主として自然科学にぞくしてゐる。これはちょうど、ノイローゼが社会的・歴史的に条件づけられてゐることはどんなに強調してもしすぎることはないが、それにもかかわらず、精神医学は社会科学でなく自然科学にぞくするのと同様である。)もちろん、パヴロフは生理学者であつたから、人間は高次の生理的・自己規整によつて特徴づけられるだけでなく、社会的・自己規整によつて特徴づけられることまで、十分に説明することはできなかつた。⁽²²⁾しかしこのことは、パヴロフの学

説がマルクス主義と矛盾するとか、限界をもっているとかいうことをすこしも意味しない。実にパヴロフをまっぴらに始めて、マルクス主義認識論の生理学的・心理学的基礎があきらかにされたのである。

こうして、いまやマルクス主義ならびにパヴロフ条件反射理論と行動主義の対立点はますます明確になる。第一に、マルクス主義と条件反射理論はつきり唯物論に立脚しつつ、しかも抽象的思考の意義を高く評価する。パヴロフによれば、言葉は「第一信号系の無数の信号の抽象であり一般化である。そしてこの原理もまた新しい一般化された信号の分析と総合を伴っている。この原理は周囲の世界における無限の方向を条件づけ、また人間の最高の適応である科学をつくりだす。」⁽²³⁾ またレーニンはいっている。「物質という抽象、自然法則という抽象、価値という抽象など、一言でいえばあらゆる科学的（正しい、まともな、無意味でない）抽象は、自然をより深く、より忠実に、より完全に反映する。生きた直観から抽象的思考へ、そしてここから実践へ——これが真理の認識の、客観的实在の認識の弁証法的道すじである。」⁽²⁴⁾ このように抽象的思考の意義を重視することは行動主義者やプラグマティストがかんがえるように「形而上学的」であろうか。いや、絶対に反対である。マルクス主義とパヴロフ理論が重視するようにならば、抽象的思考の意義をはつきり確認することによって、われわれははじめて人間労働と動物の行動との本質的相違を

明確にし、また実践の意義をあきらかにできるのである。第二に、マルクス主義とパヴロフ理論は、思考と言語がはなれがたく統一をなしていると主張する。いかなる思想が人間の脳髓に発生しようとも、またいつ発生しようとも、それはかならず言語という素材、言語の語と句にもとづいてはじめて発生し、存在することができる。言語という素材から自由な、むきだしの思想は存在しない。「言語は思想の直接的現実である。」（マルクス）だが、言語は思考とはなれがたく結びついているが、このことは、思考を言語と同一視していいことを意味しない。言語と思考の根本関係は、一致と対応であるが、しかし、両者はつねに矛盾しつつ発展しており、一般の言語は発展する科学的思考の要求におくられることが少くない。行動主義者は思考を言語と同一視し、思考など存在しないといたが、マルクス主義は、両者の関係を一つの矛盾としてとらえるのである。⁽²⁵⁾

以上、われわれはマルクス主義とパヴロフ理論の思考観・言語観をのべたが、これにたいして行動主義はどうか。くりかえしのべたように、それは機械論の立場から、人間と動物を同一視し、第二信号系の意義を無視し、抽象的思考の積極的意義、ならびに言語と思考のはなれがたい関係を否定する。同じことだが、思考を言語と同一視し、思考の存在を否定してしまふ。⁽²⁶⁾ 行動主義者によれば、言葉とはたんに条件づけられたシンボルにすぎず、客観的内容も社会的意義ももたず、あるシンボルは他のシンボルと自

由にとりかえることができる。行動主義者は言語をたんなる「記号」とみなし、しかもこれを生物体の「目標を追う行動」に還元する。行動主義とプラグマティズムを一層結びつけ、「意味論哲学」を説いたC・W・モリスはいう。記号とは「準備刺戟である。それは、ある一定の行動群の反応系列をおこす刺戟がなくても、ある条件のもとでは、この行動群の反応系列によって反応しようとする傾向を生物体のうちにおこす。」そして「言語とは、結合される仕方で限定されている一組の多元状況的な共同記号である。」⁽²⁷⁾このように言語をまったく生物学的に俗流化するモリスの主張は、新行動主義者C・L・ハルの「習慣群」(Habit Family)の理論と密接にむすびついている。⁽²⁸⁾行動主義ないし意味論は、言語が思考とはなれがたくむすびついでおり、しかもこの思考は客観的実在を反映していること、また言語の成立は人間の労働とむすびついでおり、社会的産物であることをかくしてしまふ。言葉とは、動物であろうと、人間であろうとかかわりなく、生物体のどの反応と他の運動との間の結合の表現だということになる。意味論者ハヤカワによれば、「社会は、獣のも人間のとも、巨大な協同的神経系とみなさるべきである。」⁽²⁹⁾かれは、人間社会と動物社会(?)を同一視し、人間の言語と動物の世界にみられる信号との質的相違を否定する。「獣は僅かの限られた叫びしか用いないが、人間はきわめて複雑な体系を、すなわち、ブツ、ヒュッ、ガラガラ、クックッ、コーコーという物音、すな

わち言語とよばれる複雑な体系を用い、それによって、人間はこれらの神経系におこっていることをあらわしたり報じたりする。」⁽³⁰⁾みられるように、行動主義者は第一に、人間の言語が鶏や牛の鳴きごえとほとんど同じものだと主張し、第二に、この言語は外界の主観における反映つまり意識・思考ではなくて「神経系におこっていること」をあらわすといつて、生理学的観念論を主張しているのである。このように、人間を動物視する行動主義心理学ないしその最近の「発展」である意味論が、いかに反科学的であり、反ヒューマニズム的であるかを説明する必要があるか。新行動主義者E・C・トールマンのごときは、心理学の対象、すなわち人間の心理現象ないし行動はすべて迷路実験における単の行動で説明できると主張した。そしてまさに、この点からいっても、フロイト主義に「反対」した行動主義は、実はフロイト主義と同じ生物学主義にたち、同じイデオロギー的役割をはたしている。行動主義ないし意味論は、現代資本主義のもっとも反科学的な、反ヒューマニズム的なイデオロギーの一つなのである。⁽³¹⁾

さてわたくしは、人間と動物の質的相違を無視した行動主義が、最近わが国で流行している意味論哲学の基礎になっているのを見たが、この行動主義が、さらに最近、資本主義諸国で流行している「サイバネティックス」の基礎の一つになっていることに注意したい。サイバネティックスとはなにか。それは、「動物ならびに機械における制御と通信」をあつかうといつて、アメリカの

数学者N・ウィーナーがつくりだした科学である。それは、現代の電子理論の発展、とくに最新の高速度計算機、自動制御装置、遠隔操作装置の発展にもとづいて生まれ、生理的・心理的諸現象や社会現象を電子機械ないし電子装置からの類推によって説明し、また社会生活の法則を通信の体系によって説明しようと主張する。わたくしは、ここでは、このサイバネティックスがいかに評価ないし批判されるべきかについてはくわしくたちらない。⁽³²⁾むしろここでわたくしが関心をもつのは、サイバネティックスの主張者たち、とくにN・ウィーナーが、パヴロフの条件反射の理論を応用したと自称しながら、実はこれを歪曲し、行動主義に堕している事実である。

すでにみたように、行動主義—意味論は、人間の言語を動物の通信関係と同一視したが、サイバネティックスのやろうとすることは、人間の言語を機械の通信関係と同一視することである。「われわれは普通、通信と言語を人間から人間へむけられたものと考えている。だが、人間が機械に話すこと、機械が人間に話すこと、機械が機械に話すこともまったく可能である。」⁽³³⁾こういってウィーナーは、人間の言葉がたんなる記号ではなく、第二信号系の働きであり、また社会的産物であることを無視し、機械の信号装置——かれによれば「言語」(?)——にまでひきさげる。逆にいえば、機械を人間の頭脳のレヴェルにまでひきあげる。そしてウィーナーは、計算機械が条件反射活動をおこなうとして、計算機

械と人間の脳皮質を同一視し、後者の質的特質をまったく否定したのである。なるほど、ウィーナーやフランスのサイバネティスト、フェサルらは、しばしばパヴロフの条件反射について言及してはいる。しかし、神経系を重視すると主張するにもかかわらず、実際はパヴロフの学説をまったく卑俗化してしまう。すなわち、条件反射は高次神経活動であるのに、ウィーナーは、これを腺活動の作用だと主張する。「飢、苦痛その他、条件反射を決定するどんな刺戟でも、それらの定着作用は血液をとおしてはこぼれる。……神経活動を直接または間接にかえうる物質をこぼすのは血液だということは、わたくしには非常にありそうなことだとおもわれる。また少くとも、ホルモンないし内分泌作用のあるものの活動がこのことを示唆している。」⁽³⁴⁾これは行動主義ではないか。あきらかに行動主義である。実際、イギリスのサイバネティスト、ジョン・ウイナム自身も、「サイバネティックスは活動の精神的側面を見失う。……それは、精神と身体の問題を解決しない。……それは、その先駆者(行動主義者その他)の一面性になやんでいる」と告白している。⁽³⁵⁾みられるように、サイバネティックスは、人間の心理現象を説明しない。反対に、人間の心理現象ならびに抽象的思考を排除し、人間を機械ないしロボットにひきさげる。このような行動主義的見解は、パヴロフの条件反射理論とすこしも共通のものをもたないのである。

(四) 「社会学主義」の批判

パヴロフの条件反射理論の特徴は、それが厳密に生理学にぞくする理論であつて、そのかぎりで心理学の研究に決定的な意義をもつことである。パヴロフの理論は、あくまでも、これ以上でも以下でもない。したがつて、パヴロフの学説を「生理学主義」にひきさげることすらまぢがつているが、同様に、社会的領域に機械的に拡張し、あてはめることも大きなあやまりをおかす。このよるな試みは、条件反射理論の科学的意義を歪曲し、俗流化するだけである。ところが、行動主義者たちは、人間の思考や心理現象は、物質と同じものであり、筋、腺、内臓の活動、またせいぜいのところ神経過程と同じものとみなして、「生理学主義」ないし「生理学的観念論」におちいつたが、他方では、ほかならぬこの「生理学主義」ないし「生理学的観念論」が、「社会学主義」にゆきつかざるをえないことに注意しなければならない。というのは、行動主義者は、その機械論のゆえに、物質の運動形態の質的相違をみることができず、また物質の運動形態がちがえば、これを反映し研究する科学もちがつてくることがわからない。こうしてこれらは、社会現象、社会意識、イデオロギーも生理学的な神経活動と同じものだとみなす。それは、「刺戟—反応」という機械論的図式を社会現象ならびにイデオロギーの分野にそのままあてはめて、これを研究する社会科学ないし史的唯物論を生物学、生理

学、ないし自称「心理学」でおきかえるのである。

もちろん、神経過程は、人間の心理現象の物質的基体であり、これを研究しないでは心理現象を正しく理解することはできない。しかしこのことは、社会的・政治的・文化的な生活過程を神経過程によって説明できることをけつして意味しない。社会的・政治的生活はもちろんのこと、社会的意識も文化的生活も、生理学的な神経過程によってでなく、物質的生活の生産様式によって規定されるのである。われわれは、人間の個人的心理現象にかんする研究と、人間の社会的意識・イデオロギー、社会的・政治的生活にかんする研究をまずはっきり区別し、前者は条件反射理論にもとづく科学的心理学によって研究され、後者は社会科学ないし史的唯物論によって研究されることを、はっきり確認しなければならぬ。そうでなければ、パヴロフの条件反射の理論が俗流化されるだけでなく、マルクス主義も卑俗化されてしまうのである。

わたくしは、さきに、ワトソンをはじめ、F・H・オールポート、G・H・ミードなどの行動主義者たちが、一方ではパヴロフの条件反射の理論を「生理学主義」にひきさげ、他方では「社会学主義」に飛躍して、ここから「社会心理学」で社会科学をおきかえようとしたことをみた。しかし、このようなパヴロフ理論の俗流化は、実はパヴロフ理論のもつとも忠実な紹介者とみられる人々によってなされていることに注意しなければならない。

たとえば、わが国有数のパヴロフ学者、林譟博士をみよう。博士はわが国にはじめて条件反射理論を紹介した人として、その功績はけつして小さくないが、それにもかかわらず、「社会学主義」におちいつている。すなわち博士によれば、宗教、文化、時代というものは条件反射とみなさなければならぬ。また、民族とわれわれのよびならしているものは、同じ境遇、同じ言語、同じ教育、同じ歴史をもつて形成された条件反射であり、さらに親子の關係、家庭または国家にたいする思想、道徳、法律等も条件反射の産物である。いや、民族が条件反射だとすると、社会や国家も条件反射だということになる。「国家は、社会を形成せしめると同じ無条件反射を根拠として、歴史という条件刺激をもつて形成確立した一種の条件反射ではないだろうか」と博士はいつている。こうして、民族の形成が社会的・歴史的に条件づけられており、とくに資本主義的国内市場の形成、その他三つの条件に規定されていることが無視され、またある階級の他の階級にたいする暴力装置としての国家の本質もまったくかくされてしまう。また、国家、社会、道徳、法律等が条件反射であるとすれば、これらを変革するときには、条件反射をやればいいことになってしまふ。ごらんのように、林博士は、条件反射の理論を社会的・イデオロギー的領域に「拡張」し、しかもこのことよつて、パヴロフの学説を漫画化しているのである。

パヴロフの学説をこのよつて行動主義的に歪曲する試みは、最

近、マス・コミュニケーション理論で注目されているセルゲイ・チャコーチンの著書『大衆の凌辱——全体主義的政治宣伝の心理学』にも典型的にあらわれている。チャコーチンとは、ロシア人で、一九一七年のロシア革命のときメンシェヴィキの一員として革命に「参加」し、その後、テトラ流の「科学的管理法」の宣伝につとめ、やがてソ同盟から「亡命」した学者である。かれは、みづからパヴロフの弟子だと自称し、右にあげた本のなかで条件反射の理論を社会的・政治的諸現象に適用しようと試みた。そしてこれによつてファシズムがいかに大衆を「条件反射」づけているかをあきらかにし、ここからファシズムに「反対」する方法をみつけたそうと主張した。

かれはいつ。「この本の目的は、政治的活動を精密科学の最近のデータに關係づけ、おそらく政治的活動は、あらゆる人間活動と同様、まず生物学的行動の一形式ではないかどうかをみることである。」⁽³⁶⁾こういつてチャコーチンは、ファシズムはその有害な宣傳によつて大衆の精神を「凌辱」しているから、これをふせぐためには、大衆の行動の生物学的メカニズムを理解しなければならず、そのためにパヴロフの客観的心理学の発見を、大衆の行動を理解し指導するために利用しなければならぬとかんがえる。つまり、政治活動をふくめて人間のあらゆる社会活動、社会生活を「生物学的メカニズム」・「心理学的行為」にひきさげ、これは「個人の神経系を支配する法則」にしたがっているといふのである。

る。こうして政治的行動はいまやたんなる筋肉活動にすりかえられてしまう。「政治的行動は、活動によって、すなわち、筋肉、神経、感覚器が一緒になって役割をはたす現象によって特徴づけられるから、政治についてかたるばあい、あらゆる活動の現実的基礎である生物学的現象を無視することはできない。ここでは、条件反射が唯一のではないとしても支配的な役割をはたす。……政治的活動は例外なく筋肉活動である。」⁽³⁸⁾ このような理論はなにをみちびくか。それは、一方では、人民大衆の政治的・組織的役割を筋肉活動にすりかえて、この大衆の政治行動は、「条件反射の心理学的法則」を利用して大衆をあやつる少数の「指導者」、「選良」の行為にすぎないという「選良」の理論になる。こうしてチャコーチンは、ファシズム成立の「必然性」を心理学的・生物学的に「説明」し、事実上、ファシズムの本質をかくし、これにたいする敗北主義を説教する。また他方では、革命運動も「条件反射」によってきまる「心理的活動」であって、群集のなかに入った「宣伝屋」が大声をはりあげて群集に話しかけ、群集を議論させれば、革命などひとりでおけるといふ裏がえしの「選良」の理論をみちびく。かくして、一九一七年の二月革命も、かれ、チャコーチンが「条件反射」を利用して無秩序な群集をあやつったから勝利できたというのである。チャコーチンが「指揮」した地域では、「革命の事業は流血もなく、たんなる心理学的一撃によって勝利した」⁽³⁹⁾とかれは自慢している。みられるように、この

「パヴロフ学者」(?)は、一方では、ファシズムが勝利したのは、大衆が非合理的で「選良」による「条件反射」に操作されやすいからだと主張し、他方では、革命運動を「選良」による「心理学的一撃」にすりかえ、漫画にしてしまう。このような「革命の心理学」がどんなに革命的であるかを説明する必要があるか。⁽⁴⁰⁾それは、ロシア革命を卑俗化し、マルクス主義を漫画化してしまふ。チャコーチンによれば、社会科学は生物学の一部門にすぎず、マルクス主義は、パヴロフの発見したこの生物学的・生理学的成果によって修正されなければならない。ソヴェトが成立したのも、実は、マルクス主義の正当性を説明するものではなく、生物学ないし生理学の正当性を証明するものだからである。⁽⁴¹⁾ かつてファシズムに「反対」したエーリッヒ・フロムの新フロイト主義社会心理学は、実際は、ファシズムの「必然性」を人間の不変の「心理」によって説明し、かくしてファシズムの本質をかくし、弁護したが、同様に、ファシズムに「反対」したチャコーチンのエセ・パヴロフ理論の社会心理学のゆきつくところも、ファシズムの弁護論であり、反ソ反共主義である。かれが、「客観主義心理学」を説きながら、実はフロイトやアドラーの「性本能」「闘争本能」を重視し、⁽⁴²⁾さらに自分の立場を「代償されたベシミズム」となづけ、反ファシズムないし社会主義を「神話」だとかんがえたのも理由のないことではない。くりかえしていえば、⁽⁴³⁾生気論的・本能主義的フロイト主義と機械論的行動主義は、

対立しているように見えるが、本当は同じ形而上学的観念論の両極端であり、同じ反動的な政治的役割をはたす。パヴロフの条件反射の理論は、フロイト主義はもちろんのこと、チャコーチンのような粗雑な行動主義の変種とはすこしも共通点をもたないのである。

註(1) わたくしは拙稿『社会心理学の批判』で、いかに多くの「マルクス主義者」がフロイト主義に影響され、科学的心理学の発展を妨げたかをのべたが、行動主義からの影響についても、同じことがいえる。とくにソ同盟では、ネツプの時期、一九二〇年前後から、行動主義は非常に大きな影響をおよぼした。ドイツ、アメリカの先進的技術を精力的にとりいれたとき、これと一緒にありとあらゆる外国のブルジョア・イデオロギー、心理学では行動主義、フロイト主義、ゲシュタルト理論、サイコメトリーなどが流れ込み、また機械論的イデオロギー、とくにア・エヌ・ボグダーノフ、ア・カ・ガステフ、ヴェ・エム・ベヒチエフの思想が流行した。ソ同盟における行動主義流行は、二つの方向でおこなわれた。一つは、テラー・システム、精神工学、産業心理学の流行とむすびついてであり、他の一つは児童学の流行とむすびついてである。前者の代表者には、ア・カ・ガステフ、ヴェ・エム・ベヒチエフ、ア・ベルンシュタイン、ア・ブルシエス、ピロルニコフスキー、イ・ソコロフ、グレデスクル、ウイトケ、ヤ・スピールライン、カ・エヌ・コルニコフ、エヌ・ミ斯拉フスキー、ヴェ・ラヴイノヴィッチ、エス・チャコーチンなど、後者の代表者には、ペ・ペ・ブロンスキー、エム・ヤ・パンフ、ア・ベ・ザルキンド、エス・エス・モロジ

ヤヴィなどがいた。その他、ア・ルリア、イ・エス・ペリトフなどの心理学者も部分的ないし全面的に行動主義の影響をうけた。行動主義心理学を克服し、唯物論心理学をつくりあげる斗争の第一歩となつたものは、ソ同盟共産党中央委員会の『学校についての決定』(一九三一年九月五日)であり、ついで同決議『教育人民委員部における児童学的偏向について』(一九三六年七月四日)が大きな役割をはたした。しかしそれでも行動主義の克服は十分になされず、もつとも指導的な心理学者エス・エリ・ルビンシテインの『一般心理学原理』(一九四六年)もプラグマティズムないし行動主義の影響をうけ、最近ではア・イ・ロゾフ、ヴェ・エム・アルヒーポフなどが行動主義に陥つていたのである。また一九二〇年代の行動主義の流行は、政治的にはボグダーノフ、トロツキーらに激励されていたことも注目に値する。唯物論心理学は、フロイト主義にたいすると同様、このような行動主義にたいする斗争をつうじて発展してきたのである。ソ同盟以外では、行動主義を支持した「マルクス主義者」の代表的な人物は、フランスのP・ナヴェイルである。

F. Baumgarten, *Arbeitswissenschaft und Psychotechnik in Russland*, München u. Berlin, 1924.; J. Wortis, *La psychiatrie soviétique*, Paris, 1953, pp. 24—28, 216ff, 314.; *Scientific Session on the Physiological Teachings of Academician I. P. Pavlov*, Moscow, 1951, pp. 17, 68. 矢川徳光『ソヴェト教育学の展開』一六六一—一七八、一八二、一九一—二〇一頁。

(2) Pavlov, *op. cit.*, p. 188.; Pavlov, *Lectures on Condi-*

- tioned Reflexes, Vol. I, N.Y., 1928, p. 40.; Wortis, *op. cit.*, pp. 46—47.
- (8) W. W. Lambert, *op. cit.*, p. 57. 高木貞二「他『現代心理学の展開』四六ページ。相良守次「他『現代心理学の動向』一八六ページ以下。
- (4) Pavlov, *Oeuvres choisies*, pp. 462—463. 以下、ハンズロフからの引用は便宜上フランス語版によるが、翻訳はできるだけロシア語版全集にあたり、フランス語版によらないことがあつた。
- (15) *Ibid.*, pp. 435—436.
- (9) *Ibid.*, p. 300.
- (7) *Ibid.*, p. 602.
- (8) П.А. Рудин, *Психология*, 1955. стр. 14, 33.
- (6) 「生理学的観察論」及び「生理学主義」のハンズロフの邦訳のついでに知を参照。
- Н.В. Мерведев, Марксистско-ленинская теория отражения и учение И.П. Павлова о высшей нервной деятельности, 1954, стр. 47—49.; К.М. Дедов, «К вопросу об отношениях между психологией и физиологией высшей нервной деятельности», Вопросы Филос Фии, № 1, 1954, стр. 216—218.; R. Garaudy, *La théorie matérialiste de la connaissance*, Paris, 1953, pp. 24—25.; «Les documents des journées nationales d'études des intellectuels communistes», *La Nouvelle Critique*, Avril-Mai, 1953, p. 233.
- (9) Brown, *op. cit.*, p. 482.; Boring, “Influence,” p. 288.; Lambert, *op. cit.*, p. 57.
- (11) Павловские средн, т. II, 1949, стр. 415—416. (П. А. Рудин, там же, стр. 73—74. による) また『動物の高次神経活動の客観的研究の最近の進歩』という他の論文でハンズロフはこういつてゐる。「人間の主観的分野をあつかう心理学は存在理由をもつてゐる。なぜなら、まさにわれわれの主観的世界はわれわれがである最初の实在だからである。だが人間の世界はわれわれがであるの合法性について議論の余地はないとしても、動物心理学、動物の心理学の存在理由はきわめて議論の余地のあるところである。」(Павлов, Полное собрание сочинений, 1951, т. III, 2, стр. 21—22.)
- (12) Pavlov, *Oeuvres choisies*, p. 265.
- (13) *Ibid.*, p. 440. この三原理の認識論的・哲学的意義については、Мерведев, там же, стр. 32—44. をみよ。メタウヘメンのこの本は、ソ連哲学界の最近のものとみまはされた著作の一つである。
- (14) Pavlov, *op. cit.*, pp. 438—439, 461.
- (15) *Ibid.*, p. 448.
- (9) С.Л. Рубинштейн, «Вопросы психологической теории», Вопросы Психологии, № 1, 1955, стр. 12—13.; «Психологические воззрения И.М. Сеченова и советская психологическая наука», Вопросы Психологии, № 5, 1955, стр. 30. をみよ。メソニメンは、その論文で事物の発展は内的矛盾をとおしておこなわれるという毛沢東のテーゼ(『矛盾論』)に注意し、このテーゼをみよめるか否かがハンズロフの条件反射理論と行動主義を区別するに指摘した。これは卓見である。
- (17) Pavlov, *op. cit.*, pp. 433f.
- (8) *Ibid.*, pp. 275—276.

- (19) *Ibid.*, pp. 581—582.
 (20) *Ibid.*, p. 613.
 (21) Mebeber, tam же, стр. 76.
 (22) P. G. Klemm, *Die Psychologie—eine objektive Wissenschaft*, Berlin, 1955, S. 39.
 (23) Pavlov, *op. cit.*, p. 557.
 (24) Lenin, *Aus dem philosophischen Nachlaß*, Berlin, 1954, S. 89.
 (25) B. Fogarasi, *Logik*, Berlin, 1955, SS. 89ff.
 (26) 行動主義を言語学に応用したのもっとも代表的な学者は、アメリカの L・ブルームフィールドである。かれはみずから「機械論的」言語学を提唱し、言語をたんなる「刺激—反応」の関係に分解してこれを動物の行動と同じように研究しようと主張して、思考を言語に解消した。(Cf. L. Bloomfield, *Language*, N. Y., 1951, pp. 22—41.) ノーマン・フィールドにたいする批判としては、「Les documents des journées nationales d'études des intellectuels communistes», p. 315. をみよ。
- 尚、言語と思考を同一視する行動主義は正しくないが、だからといって、行動主義を批判するのに言語と思考をきりなし、言語がなくても思考できると主張するのも同様にまちがっている。このような誤りを犯しているのは、山田坂仁氏である。(同氏『認識論』六九ページ)。言語と思考は統一として、しかも矛盾としてとらえられなければならないのである。
- (27) C. W. Morris, *Signs, Language and Behavior*, N. Y., 1946, pp. 10, 36. 言語は「記号の体系」であるか。また、

- バザロフのいう「信号」と、記号やシンボルは同じものであるか。いや、絶対に反対である。記号の本質は、その便宜的約束的性格にある。しかし、言語は、このような便宜的な記号の体系ではない。言語は、モールス符号のようなものと同じではない。言語は、思想の自然的素材であり、思想は実在をする。そして反映は「便宜」や「約束」ではないのである。この点をはっきりみとめなければ、われわれはたちまち便宜主義なし約束主義 (Konventionalismus) に、さらに主観的観念論の泥沼におちこむのである。くわしくは、ドイツ民主共和国のバザロン学会 (一九五三年) における M. ホリツチャーの説明をみよ。Vgl. *Tagungs-Bericht der Parulow-Tagung*, Berlin, 1953, SS. 171—172.
- (28) M. Scheerer, "Cognitive Theory," in Lindzey, ed., *Handbook of Social Psychology*, I, p. 129.
- (29) S. I. ハヤカシ『思考と行動における言語』邦訳、二ページ。
- (30) 同上、二二—二三ページ。
- (31) 行動主義なしの意味論の政治的・イデオロギー的役割については、くわしくはつぎをみよ。Г. А. Брутян. Что такое семантическая философия и ком она служит, 1954, стр. 35—55.; П. Трофимов, «Реакционная сущность семантической философии», *Коммунист*, № 5, 1954, стр. 68—72.; J. Marek, "The Semantic Researches of Radford and Company," *For a Lasting Peace, for a People's Democracy*, Dec. 23, 1955.
- (32) フランク主義者はサイネティックスをいかに評価すべきか。これについては、二つの意見がある。一つは、サイネ

ネティックスをエセ科学として全面的に批判する見解（フランスのマルクス主義者、A・ランタン、ソ同盟の筆名マテリアリスト、ならびに前記のブルーチャン、トロフィモフ、メドヴェデフ、ポーランドのボグロフスキー、グネニエフスキーその他が代表的）であり、他は、サイバネティックスを「創造的科学」とみるイギリスのマルクス主義者、J・D・バナール、ソ同盟のエス・エリ・ソボレフ、イエ・コリマンらの見解である。これについては、くわしくは別の論文でとりあげねばならないが、わたくしはつぎのようにかんがえる。(一)、科学の特殊な部門としてはサイバネティックスは存在理由をもつてゐる。(二)、しかしサイバネティックスが「綜合科学」としての存在権を要求するとき、それはエセ科学になる。

(三)、ウィーナーの本には資本主義にたいする「批判」があるから「進歩的」だとか、ウィーナーはブルジョア自由主義的だからいいというソボレフやコリマンの見解は正しくない。このような過大評価は、アメリカ・イデオロギーの特殊性と二重性の無理解からでてくるものである。

(33) N. Wiener, *The Human Use of Human Beings*, N. Y., Anchor edition, 1954, p. 76.

(34) *Ibid.*, p. 72.

(35) Маршаллер, «Кому служит кибернетика», *Вопросы философии*, № 5, 1953, стр. 216. による。フランスのサイバネティスト、フェサールのゆきつくところも、パヴロフがはげしく批判したシェリントンの二元論である。Cf. «Les documents...», pp. 259—260.

(36) 林謙『条件反射学応用論』一九五一年、一三二—一三三ページ。また、林謙『条件反射』岩波全書、二〇ページをみ

よ。

(37) S. Chakotin, *The Rape of the Masses—The Psychology of Totalitarian Political Propaganda*, London, 1940, p. xvii.

(38) *Ibid.*, pp. 33—34.

(39) *Ibid.*, p. 40.

(40) このような心理主義的な革命観はトロツキーにも共通して S. 参。Vgl. F. Baungarten, *op. cit.*, S. 114.

(41) Chakotin, *op. cit.*, pp. 266—267.

(42) *Ibid.*, pp. 49—67.

(43) *Ibid.*, pp. 275—277, 288.

(未完)

附記。この論文を草するにあたり、柘植秀臣教授、三井田一男氏、岡田靖雄氏をはじめ多数の先輩ならびに友人が御教示と文献の便宜をあたえられた。記して心からの謝意を表す。尚、この論文は昭和三〇年度文部省科学研究助成金による研究の一部である。一九五六年三月八日。